

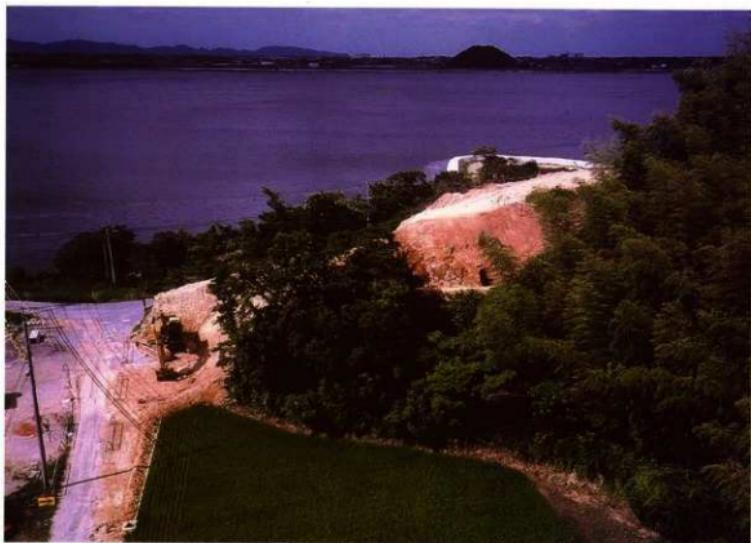
はつ かみ

八神横穴墓群

—島田地区ふるさと農道整備事業道路工事にかかる埋蔵文化財発掘調査—

2001年3月

島根県松江農林振興センター
安来市教育委員会



八神横穴墓群遠景（上空から）



八神横穴墓群遠景（西から）



2号横穴墓玄室（左：床面、右：炭層上面）

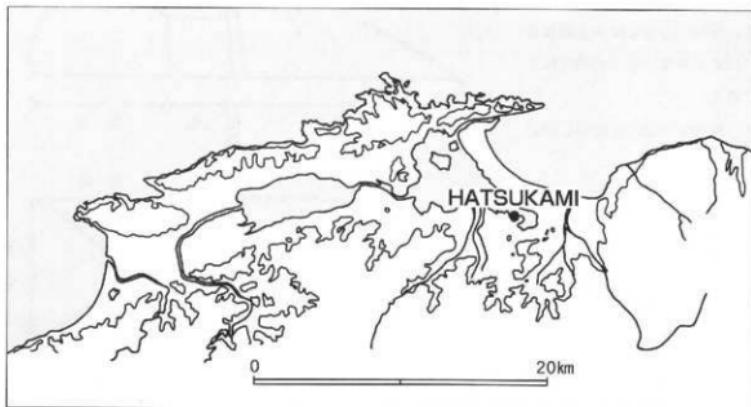


2号横穴墓玄室（上の写真の矢印部分の拡大、酸化地山部分）

はつ かみ

八神横穴墓群

一島田地区ふるさと農道整備事業道路工事にかかる埋蔵文化財発掘調査一



例　　言

1. 本書は、島根県松江農林振興センターの委託を受けて、安来市教育委員会が平成12年度に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書で掲載した遺跡は、島根県安来市島田町字八神1752-1に所在する八神横穴墓群である。日つから　はつかみ

3. 現地調査期間は以下のとおりである。

平成12年6月1日～平成12年7月30日

4. 調査組織は次のとおりである。

委託者	島根県松江農林振興センター	所長	濱浦敏明
受託者	安来市	市長	島田二郎
主体者	安来市教育委員会	教育長	市川博史
事務局	安来市教育委員会文化振興課	課長	前田敏巳
		文化係長	武上　巧
調査指導	島根県立松江北高校		大谷晃二
調査員	安来市教育委員会文化振興課	文化係主事	水口晶郎
整理作業員	泉あかね		

5. 現地調査、及び資料整理については、上記の調査指導の先生の他、安来市文化財保護委員の会、株式会社平井建設、安来市経済部耕地課、丹羽野裕（島根県埋蔵文化財調査センター）のご指導、ご協力をいただいた。（敬省略）

6. 出土遺物の鉄器のX線透過写

真撮影については、島根県埋蔵

文化財調査センターのご協力、
ご指導を得た。

7. 掘図中の方位は国土調査法

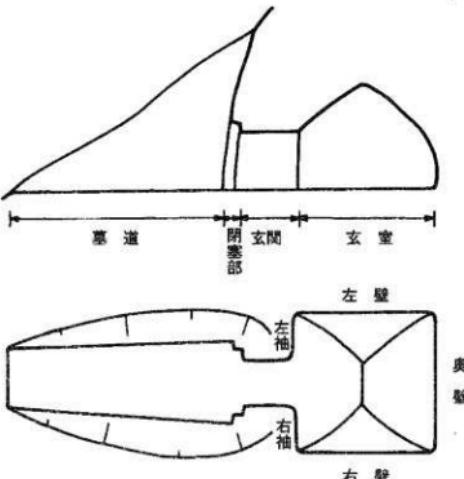
による第Ⅲ座標系の軸方位で
ある。

8. 掘図中の縮尺は図中に明示
した。

9. 本調査に伴う遺物、実測図
、写真等は安来市教育委員会
で保管している。

10. 本書の編集、執筆は水口が
行った。

11. 本書で呼称する横穴墓の名
称は右のとおりである。



横穴墓各部名称図

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 位置と環境	3
第3章 調査の概要	8
第1節 1号横穴墓	9
第2節 2号横穴墓	17
第3節 3号横穴墓	23
第4節 4号横穴墓	26
第4章まとめ	31
第1節 横穴墓群の時期・形態について	31
第2節 2号横穴墓について	31
第3設 安来市中海東岸部の横穴墓について	32

挿図目次

第1図 調査区位置図 (S = 1/5,000)	2
第2図 周辺の主要遺跡位置図 (S = 1/20,000)	4
第3図 調査区調査後地形測量図 (S = 1/100)	8
第4図 1号横穴墓実測図 (S = 1/60)	10
第5図 1号横穴墓遺物出土状況図 (S = 1/30)	12
第6図 1号横穴墓出土遺物実測図1 (S = 1/3)	13
第7図 1号横穴墓出土遺物実測図2 (S = 1/4)	14
第8図 1号横穴墓出土遺物実測図3 (S = 1/2)	15
第9図 2号横穴墓実測図1 (S = 1/60)	17
第10図 2号横穴墓実測図2 (S = 1/60)	18
第11図 2号横穴墓遺物出土状況図 (S = 1/30)	20
第12図 2号横穴墓出土遺物実測図 (S = 1/3)	21
第13図 3号横穴墓実測図 (S = 1/60)	24
第14図 3号横穴墓出土遺物実測図 (S = 1/3)	25
第15図 3号横穴墓玄室実測図 (S = 1/30)	25
第16図 4号横穴墓実測図 (S = 1/60)	28
第17図 4号横穴墓遺物出土状況図 (S = 1/30)	29
第18図 4号横穴墓出土遺物実測図 (S = 1/3)	30

第1章 調査に至る経緯と経過

島根県松江農林振興センターは、干拓地増反農家の利便性の向上を図り、併せて農産物の流通促進と沿岸地域の活性化を目的として、恵乃島町を起点として須崎中海沿岸を経由し、中海干拓安米工区（徳島島町）の幹線道路と直結する、市街地から島田地区へのアクセス道路として島田地区ふるさと農道整備事業を平成10年度より5ヶ年計画で着手した。

平成10年1月13日付で安来市經濟部耕地課より事業施工区間の埋蔵文化財分布調査依頼を受け、市教育委員会で踏査したところ遺跡・遺物は発見されず、平成10年5月22日付で工事施工に関わる文化財関係では問題なしとの回答した。

ところが、平成12年5月8日に市經濟部耕地課より農道工事中に土器が出てきたとの連絡を受けた。現地を確認したところ横穴墓（1号横穴墓）の玄室天井部が重機の掘削により開口しており、須恵器等遺物が確認できた。また、発見された横穴墓の東側の地形観察から、横穴墓がまだ数基存在している可能性が考えられた。そこで、同年5月15・16日に発見された横穴墓と隣接する斜面を重機で表土を剥いだところ、調査の契機となった横穴墓を含め3基（1・2・4号横穴墓）の横穴墓の墓道を検出した。

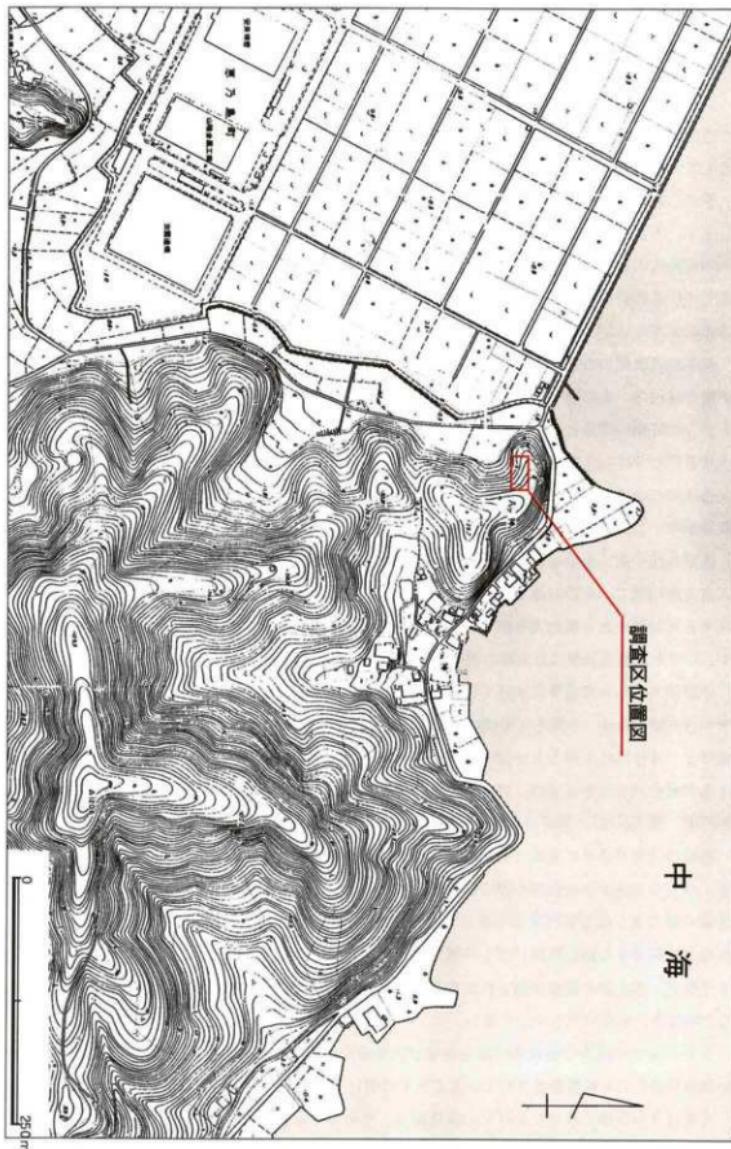
早速、事業主である島根県松江農林振興センター・市經濟部耕地課・市教育委員会の3者で今後の対応協議した結果、遺跡の現状保存は困難であり、また工事が進行中であることから早期に発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。

協議がまとまり、平成12年5月19日付で発掘調査依頼を受け、同年5月26日付で島根県松江農林振興センターと埋蔵文化財発掘調査について委託契約を締結し、同年6月1日に発掘調査を開始した。

今回発掘調査を実施した横穴墓は、いずれも事業区域が墓道の途中で切れており、2m程直下に掘削して玄室に入るという、調査としては非常にやりにくいものであった。調査は基本的には墓道から玄室までの縦断ライン、調査区が墓道の途中で切れていることにより横断ラインは調査区端に設定し、土層を観察を行なながら進めた。

当初3基の横穴墓が所在すると想定していたが、調査を進める中で7月3日に2号横穴墓と4号横穴墓の間を精査したところ、もう1基発見され（3号横穴墓）合計4基の横穴墓からなることとなった。

当初、1ヶ月間の予定で調査に入ったが、予想を超える遺物や砾床など遺構を検出したことにより、期間を延長して平成12年7月30日に空撮を実施し、実働34日間で現地調査のすべてを終了した。出土した遺物や図面の整理は、平成13年1月から3月にかけて随時実施した。



第1図 調査区位置図 ($S = 1/5,000$)

第2章 位置と環境

八神横穴墓群は、安来市島田町字八神の中海に突き出す丘陵南側に位置している。

当遺跡が所在する黒井田町・島田町周辺の中海海岸部は、出入りに富む典型的な沈水性海岸線をなしている。そのため周囲には低地の発達が見られず、若干の谷水田があるのみである。

さて、近年当遺跡周辺で発掘調査が進み、地域の様相が明らかになりつつある。

まず、旧石器時代の遺跡として小汐手遺跡^①で玉髓製の削器が単独で出土しているのみである。次の繩紋時代の遺跡も數少なく、前述の小汐手遺跡、高広遺跡^②、浦ヶ部遺跡等で若干の繩紋上器が出土しているのにすぎない。続く弥生時代前期の遺跡も小汐手遺跡等で弥生前期の土器が出土しているのにすぎないが、弥生時代中期になると、高広遺跡^③、宮内遺跡^④で竪穴住居跡が検出されている。

弥生時代後期になると遺跡数が急激に増加し、高広遺跡^⑤、宮内遺跡^⑥、小汐手遺跡^⑦、米垣遺跡^⑧、黒井田小林遺跡^⑨、大原遺跡^⑩、臼コクリ遺跡^⑪、越岬遺跡^⑫、岩屋口北遺跡^⑬など多数集落跡が検出されている。この時期の墳墓として特殊器台が出土した臼コクリ遺跡^⑭、68基の埋葬施設が検出された長曾土壙墓群^⑮が挙げられる。

古墳時代前期の古墳として礫床に割竹形木棺を安置した新林古墳群^⑯が挙げられる。集落跡として鉄斧が出土した浜崎遺跡^⑰が確認されている。

古墳時代中期に入ると、この地域の首長墓である毘売塚古墳^⑱が築造される。全長42mの帆立貝式前方後円墳で、舟形石棺を直葬している。この他に首長墓と考えられる古墳として、前方部が所在する可能性があり組合式石棺を主体部にもつ十神山古墳^⑲、前方後方墳の油坪1号墳^⑳が挙げられるが、いずれも墳丘規模は毘売塚古墳の半分程度である。

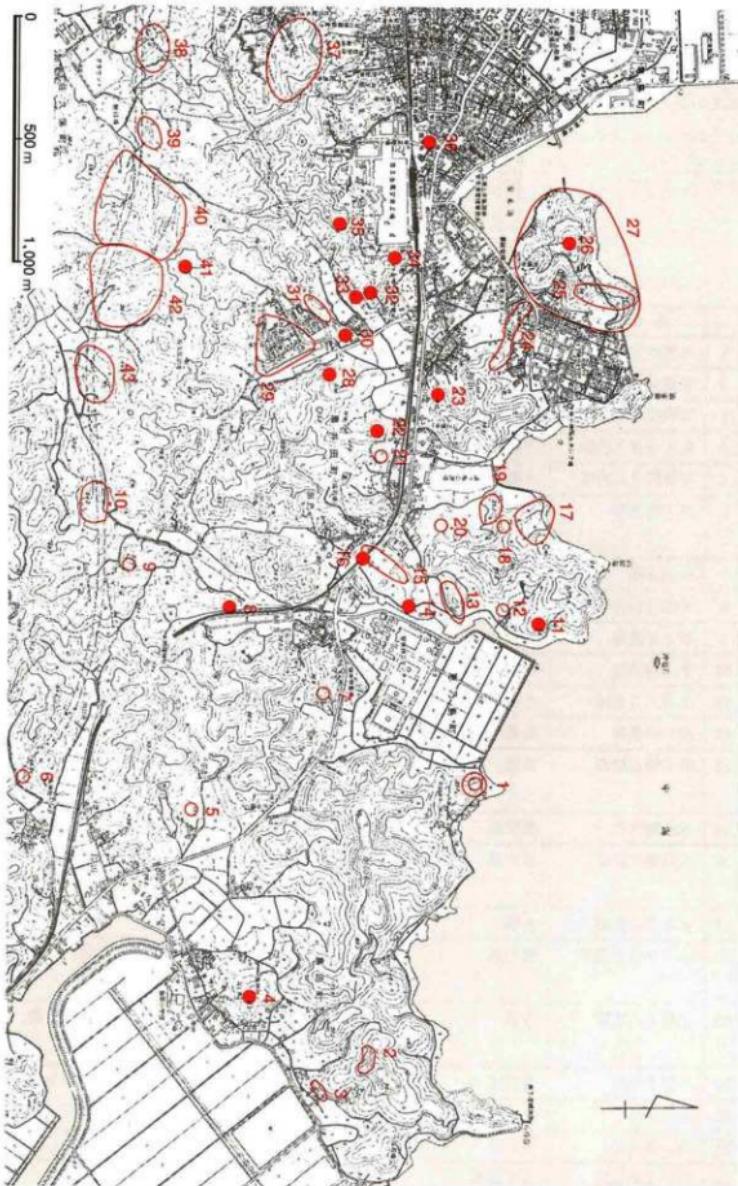
中期後半から後期前半にかけて墳丘規模が10m前後の古墳が多数築造される。その中には特筆すべき古墳もあり、小馬木2号墳^㉑は径11m程の円墳であるが家形埴輪・珠文鏡等を出土しており、油坪2・4号墳^㉒は1辺10m強の方墳であるが埴輪に円筒埴輪列が廻っている。客人神社跡古墳^㉓は2基の組合式石棺を主体部に持つおり、その他に石棺を主体部に持つ古墳として宮の山古墳^㉔(墳形不明、箱式石棺)、御崎谷古墳^㉕(墳形不明、舟形石棺)が挙げられる。

古墳時代後期後半になると当地域では横穴式石室は築かれず、横穴墓がほぼ全域で多数築造される。中でも全長10m強の小型の前方後円墳形の墳丘をもつ浜小崎5号墳^㉖、岩屋口北1号墳^㉗(宮内遺跡の横穴墓も前方後円墳形の墳丘を持つことが推定される)、家形石棺を内蔵し金銅製大刀・馬具などを副葬する高広遺跡IV区1号横穴墓^㉘、宮内遺跡1号横穴^㉙、臼コクリ遺跡S区2号横穴^㉚、F区2号横穴^㉛、銀象嵌の模様が刻まれた大刀が副葬されていた小汐手八区2号横穴墓^㉜、B区4号横穴墓^㉝など特筆される横穴墓も少なくない。

また、近年の調査で横穴墓の築造地域が内陸部だけでなく、本書で報告する八神横穴墓を始め、中海海岸沿いにも多数築造されていることが判明している。

古墳時代中期から後期にかけての集落跡は、その多くは丘陵斜面部より検出されている。工作工具跡である大原遺跡^㉞を始め、小汐手遺跡、高広遺跡、長曾遺跡^㉟などで確認されている。

当地域の古代から中世にかけての様相は判然としないが、奈良時代から平安時代にかけての掘立



第2図 周辺の主要遺跡位置図 ($S = 1 / 20,000$)

柱建物跡が高広遺跡、岩屋口南遺跡³等で確認されている。また、油坪3号墓³では南北朝時代と推定される陶製宝鏡印塔を持つ火葬墓が検出されている。十神山は室町時代～戦国時代の山城で出雲国安来莊の地頭であった松田氏の本城とされ、自然地形を利用した郭の加工跡が比較的良好に保存されている。尼子氏に背いた松田備前守が籠城した十神山城は、1468年に尼子清定によって開城させられている。その後も出雲国の防衛体制の要として、尼子十塔の一つとして機能していたと考えられる。³

周辺の主要遺跡一覧

遺跡名	種別	概要
1 八神横穴墓群	横穴墓	本古、横穴墓4、鍔付大刀
2 赤崎山横穴墓群	横穴墓	横穴墓2
3 羽根横穴墓群	横穴墓	横穴墓2
4 ちよう塚古墳群	古墳	方墳2、陶棺
5 剣御崎さん古墳	古墳	円墳、消滅
6 岩田南遺跡	集落跡	奈良掘立柱建物跡、須恵器、土師器、墨青土器、ヘラ描き土器
7 小浜古墳	古墳	墳形不明、石材露出
8 大納言山古墳	古墳	円墳、鐵劍、鐵刀
9 鶴ノ谷遺跡	集落跡	弥生後期集落
10 才ノ神遺跡	集落跡、祭祀跡	弥生後期集落、奈良～平安祭祀
11 小馬木口遺跡	古墳	円筒埴輪棺
12 浜小崎遺跡	集落跡	古墳前期集落、鐵斧、砥石、土師器
13 浜小崎古墳群	古墳、横穴墓	古墳6、前方後円墳（横穴墓に伴う？）、馬形埴輪、円筒埴輪、横穴墓1（方墳）、
14 米垣横穴墓	横穴墓	横穴墓1
15 黒鳥横穴墓群	横穴墓	横穴墓2、鍔付大刀、鐵鎌、刀子、須恵器
16 大日さん古墳	古墳	円墳、葺石、円筒埴輪
17 小汐手横穴墓群	横穴墓	横穴墓19、銀象嵌大刀2、鐵劍、鐵鎌、刀子、玉、須恵器、土師器
18 小馬木古墳群	古墳	古墳3、家形埴輪、円筒埴輪、珠文鏡、須恵器、土師器
19 小汐手遺跡	集落跡	旧石器削器、弥生後期・古墳中期集落跡
20 長曾遺跡	集落跡	古墳後期集落
21 浦ヶ部遺跡	集落跡	繩紋土器、須恵器
22 長曾土壙墓群	弥生墳墓	弥生後期区画墓・土壙墓・木棺墓
剣畠1号墳	古墳	円墳、円筒埴輪、鐵刀、刀子

遺跡名		種別	概要
23	宮の山古墳	古墳	箱式石棺
24	油坪古墳群	古墳、中世墓	前方後方墳1、方墳4、形象埴輪、円筒埴輪列、須恵器、中世火葬墓、石組基壇、陶製宝鏡印塔2、石製五輪塔、方墳1基を除き消滅
25	小十神山古墳群	古墳	円墳2、鉄刀
26	十神山古墳	古墳	前方後方墳?、蒲鉾型蓋石石棺
27	十神山城	城跡	室町～戦国期山城
28	米垣遺跡	集落跡	弥生後期集落
29	高広遺跡	横穴墓、集落跡	弥生～奈良集落、横穴墓13、家形石棺、金銅装双竈環頭大刀
30	寄神社跡古墳	古墳	蒲鉾型蓋石石棺2、須恵器
31	長廻谷古墳群	古墳	円墳
32	佐久保山古墳	古墳	円墳
	佐久保山横穴墓群	横穴墓	横穴墓群
33	黒井田小林遺跡	集落跡	弥生後期集落跡、掘立柱建物跡
34	毘堺塚古墳	古墳	前方後方墳、葺石、舟形石棺、円筒埴輪、鉄劍、鉄鋸、ヤス、鉄鎌
35	御嶺谷古墳	古墳	舟形石棺、鉄劍
36	愛宕山古墳	古墳	消滅
37	堀谷横穴墓群	横穴墓	横穴墓10以上、家形石棺、金環、須恵器、玉類他
38	宮内遺跡	横穴墓、集落跡	弥生後期集落、横穴墓2（前方後円墳形墳丘?）、家形石棺、馬具、銀象嵌大刀
39	大原遺跡	横穴墓、集落跡、玉作跡	弥生後期集落、古墳中期玉作、横穴墓2、家形石棺、青銅鏡片
40	白コクリ遺跡	弥生墳墓、横穴墓、集落跡	弥生後期落、弥生後期墳丘墓、土壙墓、特殊器台、古墳、円筒埴輪、横穴墓19（後背墳丘）、家形石棺6、金銅装單竈環頭大刀、馬具、須恵器子持壺
41	大荒神谷古墳群	古墳	前方後円墳
42	岩屋口北遺跡	横穴墓、集落跡	弥生後期集落、横穴墓2（前方後円墳形墳丘）、円筒埴輪、馬具、鉄滓
	岩屋口南遺跡	横穴墓、集落跡	弥生後期・古墳中期集落、古墳後期以降掘立柱建物、横穴墓7、鉄刀
43	越峰遺跡	集落跡	弥生後期・古墳後期～奈良集落

註

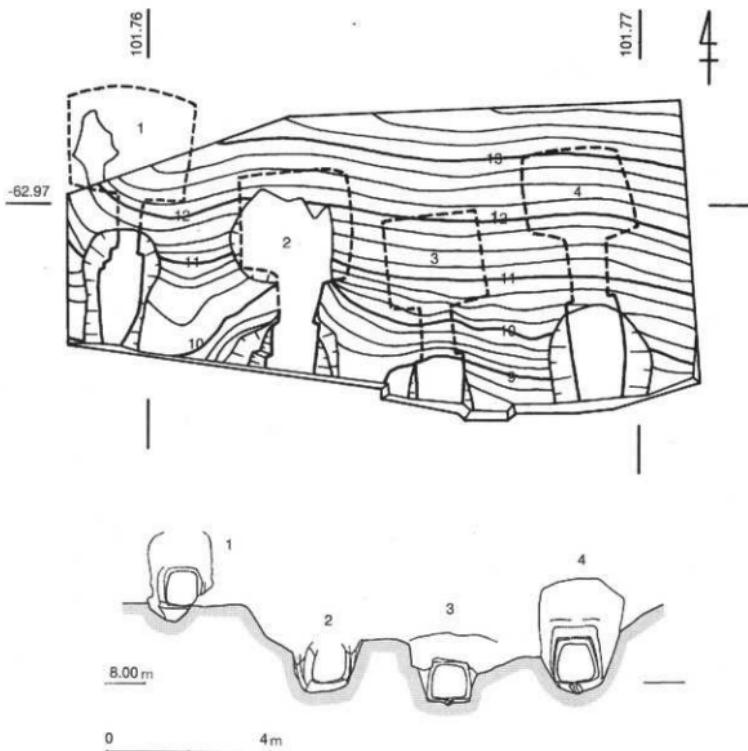
1. 安来市教育委員会「小汐手遺跡・黒井田小林遺跡」1999
2. 島根県教育委員会「高広遺跡」和田団地造事業に伴う発掘調査 1982
3. 島根県教育委員会「越野遺跡・宮内遺跡」一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 1993
4. 安来市教育委員会「長曾土塙墓群・劍畠1号墳」2000
5. 註1と同じ
6. 島根県教育委員会「臼コクリ遺跡・大原遺跡」一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V 1994
7. 註6と同じ
8. 註3と同じ
9. 島根県教育委員会「岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡（F区）」一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13 1997
10. 註4と同じ
11. 安来市教育委員会「市道清水線試掘調査概報 新林遺跡・札神社2号墳」1993
12. 安来市教育委員会「浦ヶ郡御跡群発掘調査報告書」1994
13. 大谷晃一・清野孝之「安来市尾光塚古墳の再検討」「島根考古学誌」第13集 1996
14. 安来市教育委員会「安来市内遺跡分布調査報告」1991
15. 安来市教育委員会、1998年調査
16. 安来市教育委員会「小馬木古墳群」浦ヶ郡地区住宅団地造成事業内埋蔵文化財発掘調査報告書I 1998
17. 註15と同じ
18. 松本岩雄「客神社跡古墳について」「ふいーると・のーと」No.5 本庄考古学研究室 1983
19. 内田才「原始・古代」「安来市誌」1970
20. 野津右馬之助「島根歴史」第4巻 1925
21. 註12と同じ
22. 註9と同じ
23. 註2と同じ
24. 註3と同じ
25. 註6と同じ
26. 註9と同じ
27. 安来市教育委員会、1998年調査
28. 註6と同じ
29. 安来市教育委員会「長曾遺跡」1978
30. 島根県教育委員会「岩屋口南遺跡」一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 1996
31. 註15と同じ
32. 島根県教育委員会「島根県中近世城郭跡調査報告書2集 出雲・隱岐の城跡」1998
33. 江田哲也「戦国期の安来」「安来市誌」上巻 1999

第3章 調査の概要

八神横穴墓群は、西に向けて中海に突き出た丘陵の末端部の南側斜面、丘陵尾根から約2~6m下がった標高約8~10mに位置している。同丘陵の北側・西側の丘陵端部は崖状となっている。調査前は、果樹園であった。調査前の地形は、ある一定の角度を持って斜面が水田面まで続いており、遺構の存在を示す地形変化等は認められなかった。

横穴墓はいずれもほぼ南側に向けて開口し、土層観察や閉塞石の状態から盗掘を受けた様相は認められなかった。西側から順に1号横穴墓から4号横穴墓と呼称した。調査区の東側には同様の地形が続いており、当横穴墓群が引き続き造墓されている可能性がある。

尚、2号横穴墓~4号横穴墓は工事施工面より低い位置にあり、現地で保存されている。



第3図 調査後地形測量図 ($S = 1/100$)

第1節 1号横穴墓（第4図～第8図）

1号横穴墓は、調査区の西端に位置し、当遺跡発見の契機となった横穴墓である。開口レベルは他の3基の横穴墓と比べ約2m高い標高約10.3mに、ほぼ南を向いて開口する。

墓道（第4図） 墓道は長さ1.6m以上で、南側は調査区外に続いているが、調査区外の地形観察から長い墓道をもつとは考えにくい。幅が床面の調査区端で0.34m、玄門側で1.06m、高さ1.7mを測る。床面は閉塞部から0.7mまではほぼ水平であるが、そこから先は傾斜を増し落ち込んでいる。平面形態は、前方に向かって先細りとなるタイプである。

図示しなかったが、墓道検出時に須恵器瓦片3点出土している。

墓道土砂堆積状況（第4図） 墓道は土砂により完全に埋まっていた。層位は比較的単純で土層観察では、追葬面等は観察できなかったが、赤褐色粘質土層（6層）の上に閉塞石が載っていることから、そこが追葬面の可能性が考えられる。

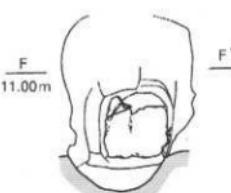
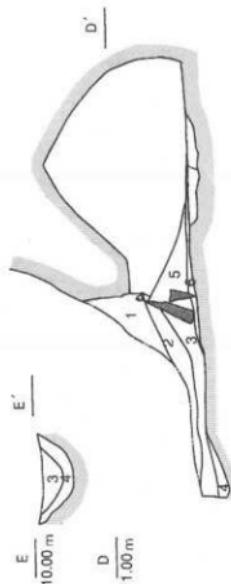
閉塞石・閉塞部（第4図・5図） 閉塞部には幅10cmの刻り込みがあり、閉塞石はちょうどその刻り込みに挿まれた形で検出された。基本的大型の1枚石を少し傾けて玄門を塞いだもので、その右側と上部にその隙間を埋めるように拳大～人頭大的自然石を置いている。この大型の1枚石は、高さ約65cm、幅約75cm、厚さは上部で3cm・下部で15cmと上部に向けて厚さが狭くなっている。表面に加工痕等は確認できなかった。

石材は地山の材質と良く類似しているように観察された。

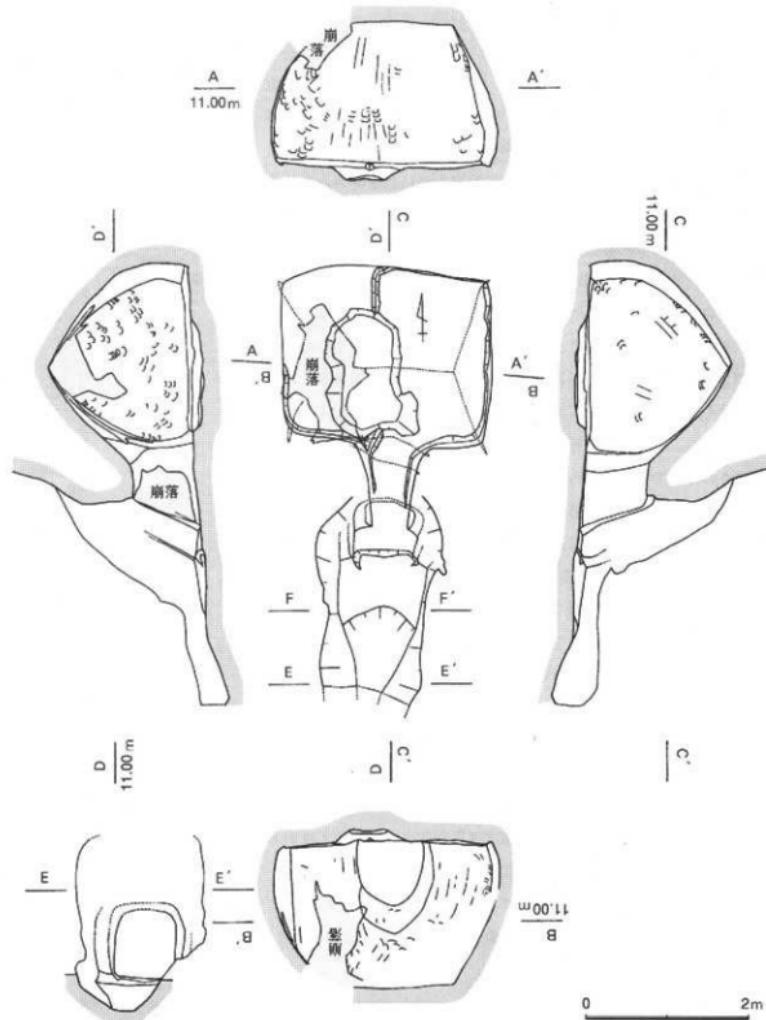
玄門（第4図・5図） 玄室側から墓道側にむけて狭まり、長さ約100cm、幅は玄室側で約60cm、墓道側で40cmを測る。遺物は左壁に沿って床より約13cm浮いた状態で、須恵器蓋壙蓋（第6図1）が検出された。

玄室（第4図・5図） 玄室の規模は、長さ220cm、幅254cm、高さ180cmを測り、やや横長の長方形を呈する。形態は平入りの四柱式天井である。四壁は内傾しながら立ち上がり、天井部の軒を加工しないわゆるテント形である。玄室左壁天井部は、発見時の重機の掘削により開口している。壁面には工具痕がそのまま残る部分と平滑に仕上げた部分とが認められた。確認できる工具痕はすべて丸刃状で、幅は10～13cmを測る。

1. 茶色粘質土（0.5～2cm程の小レキ少量合）
2. 淡茶褐色粘質土（0.5～2cm程の小レキ少量合）
3. 茶褐色粘質土（0.5～5cm程の地山ブロック多く合）
4. 茶褐色粘質土（薄少ない、粘性強）
5. 茶褐色粘質土（薄少ない、粘性強）
6. 赤褐色粘質土（0.5～1.0cm程の小レキ多量合）
7. 淡褐色粘質土（0.5～5mm大の地山ブロック多く合、ゆるい）



方向は壁面中央部が上方から下方に、壁面間の境界付近は上方から下方に斜めにその境界に向けて削られている。壁面が平滑に仕上げられた部分の工具の動きも上下方向であるが、どちらが始点であるか確認できなかった。床面には北西コーナー部を除き、4周およびほぼ中軸に沿って縦方向に玄関部まで延びる幅約8cm、深さ約3cmの浅い排水溝が見られる。中軸部の排水溝を切るように、長さ約160cm、幅90cm、深さ約12cmの不定形な掘り込みがあり、地山ブロックを多く含む淡褐色粘質土（7層）で充填されていた。排水溝とこの掘り込みとの切り合いは確認することができなかった。



第4図 1号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

遺物はすべてこの掘り込みを充填した層の上面で出土していること等から考えると、この7層は床を整える置き土と推定される。

玄室内人骨・遺物出土状況（第5図） 玄室内からは人骨のほか須恵器14点、鉄器19点、耳環1対が出土している。遺物はすべて床面上か7層上面より出土した。人骨は玄室右半分の3箇所より出土したが、いずれも取り上げができない程遺存状態が非常に悪かった。玄室北東コーナー付近には、須恵器蓋坏4点、刀子4点、耳環1点検出した。このうち、蓋坏（3）は天地逆に置かれしており、その中に耳環（24）が置かれていた。南東コーナー付近には須恵器蓋坏4点、躰1点、提瓶2点、鉄鎌、耳環が出土している。このうち、提瓶（13）の中から鉄鎌（27）が出土している。玄室前面左側からは、須恵器直口壺1点、蓋坏身1点が前壁に沿って排水溝上に置かれていた。前壁玄室中央部には提瓶1点、鉄刀片1点が出土しており、このうち提瓶（14）は調査時には破碎された状態で検出したが、これは重機の掘削により天井部地山が落下した衝撃で破損したものである。大刀（16）は左壁に沿ってやや奥壁側に、背を壁側に先端を玄門側に向けて置かれていた。

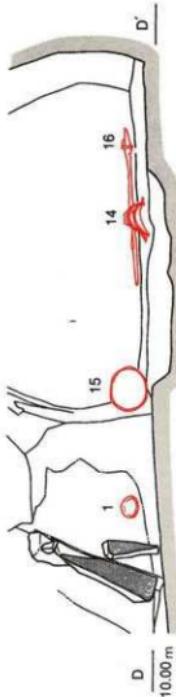
玄室右半分に置かれていた蓋坏は、それぞれ2個がセット（10と3、5と7、8と2、4と9）で置かれており、枕としていた可能性がある。このうち（10）と（3）のセットは、蓋が天地逆・坏身は天地そのままで置かれており、枕として使われたと考えるのは躰躇されるが、蓋の中より耳環が出土していることから前述の想定も肯定されるのではないだろうか。

1号横穴墓出土遺物（第6図～第8図） 須恵器の器種構成は蓋坏（第6図1～10）、直口壺（第6図11）、躰（第6図12）、提瓶（第7図13～15）である。このうち、（1）と（12）は出雲地域以外との関連を考慮すべき資料である。

1～4は蓋坏である。1は玄門部出土で口径13cmを図り、肩部に沈線・稜などをもたない。口縁部端は丸く收める。天井部は前半はヘラケズリを施す。2～4は口径12.4～12.8cmを図り、口縁部と天井部の境には2本の凹線とナデにより稜を設ける。天井部前半はヘラケズリを施し、口縁端部はすべて丸く收める。これら蓋坏の時期は、すべて大谷編年出雲4期である。

5～10は蓋坏身である。口縁部はある程度の高さを持ちながら内傾気味に立ち上がり、外面天井部にはヘラケズリを施す。口径・受部径から大きく2グループに分かれ、（6）と（9）が口径11.3～11.5cm、受部径14.0cm、その他が口径10.3～10.9cm、受部径13.2～13.7cmを測る。

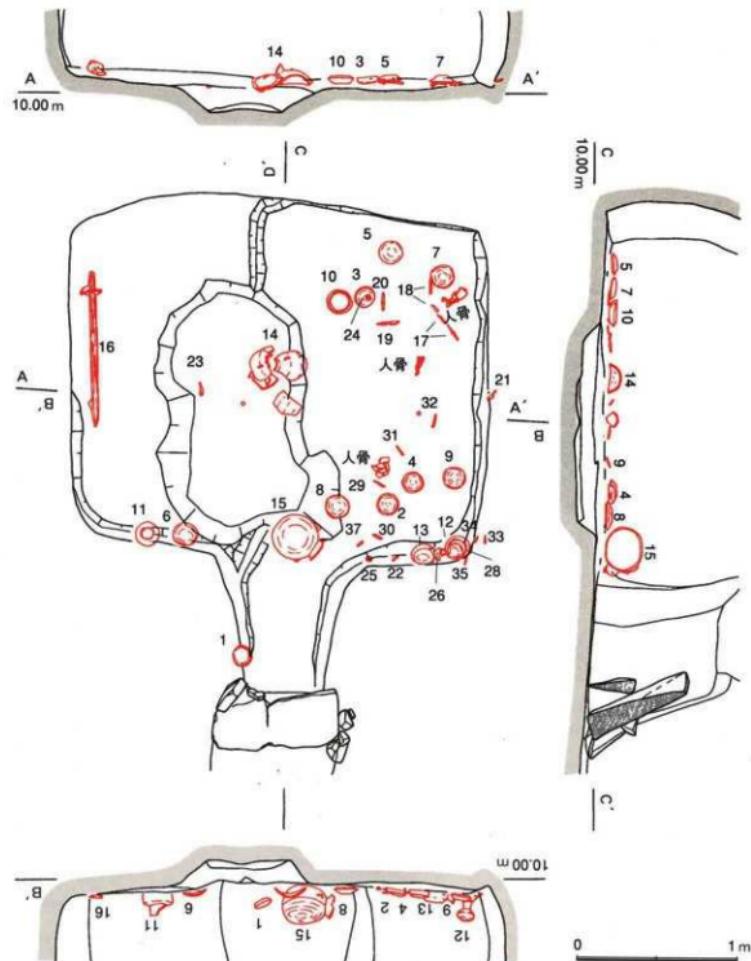
11は直口壺である。器高13.5cmを測り、口縁部の大部分は欠損している。胴部の上方の肩部に最大径があり13.3cmを測り、体部上半部にはカキメを、体部下半分及び底部には丁重にヘラ削りを施

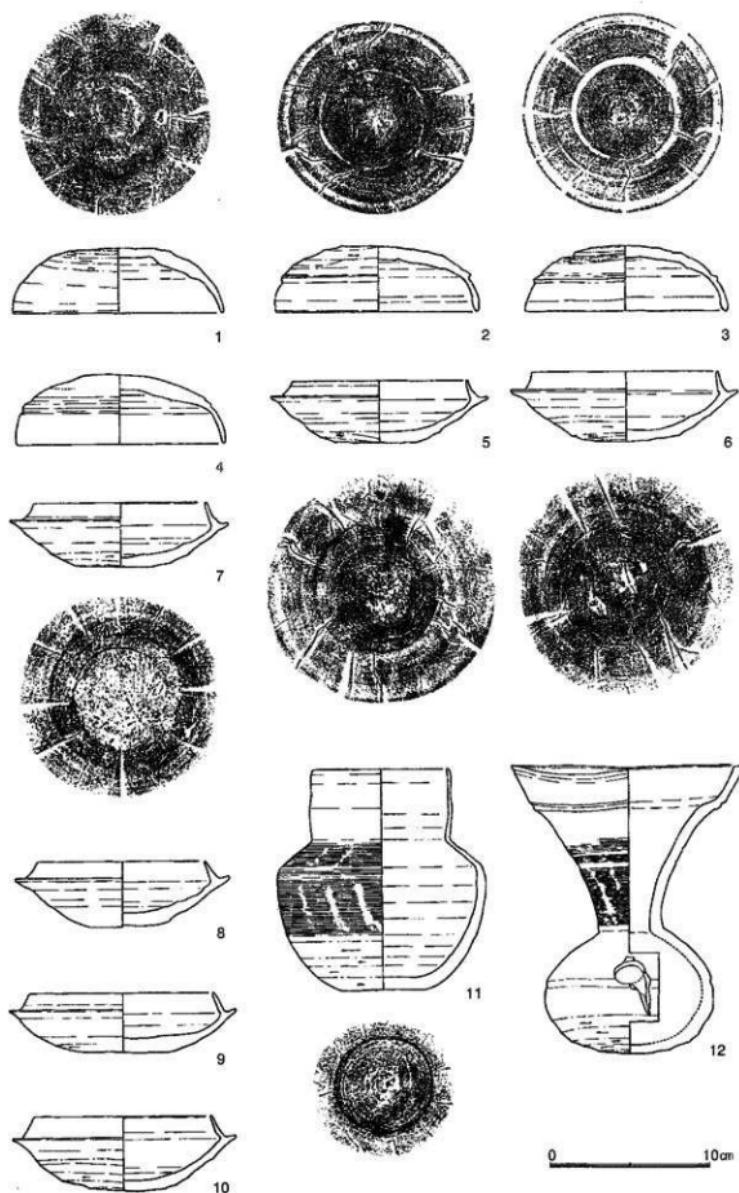


す。口縁部はほぼまっすぐに立ち上がり、復元口径8.2cm、高さ4.5cmを測る。

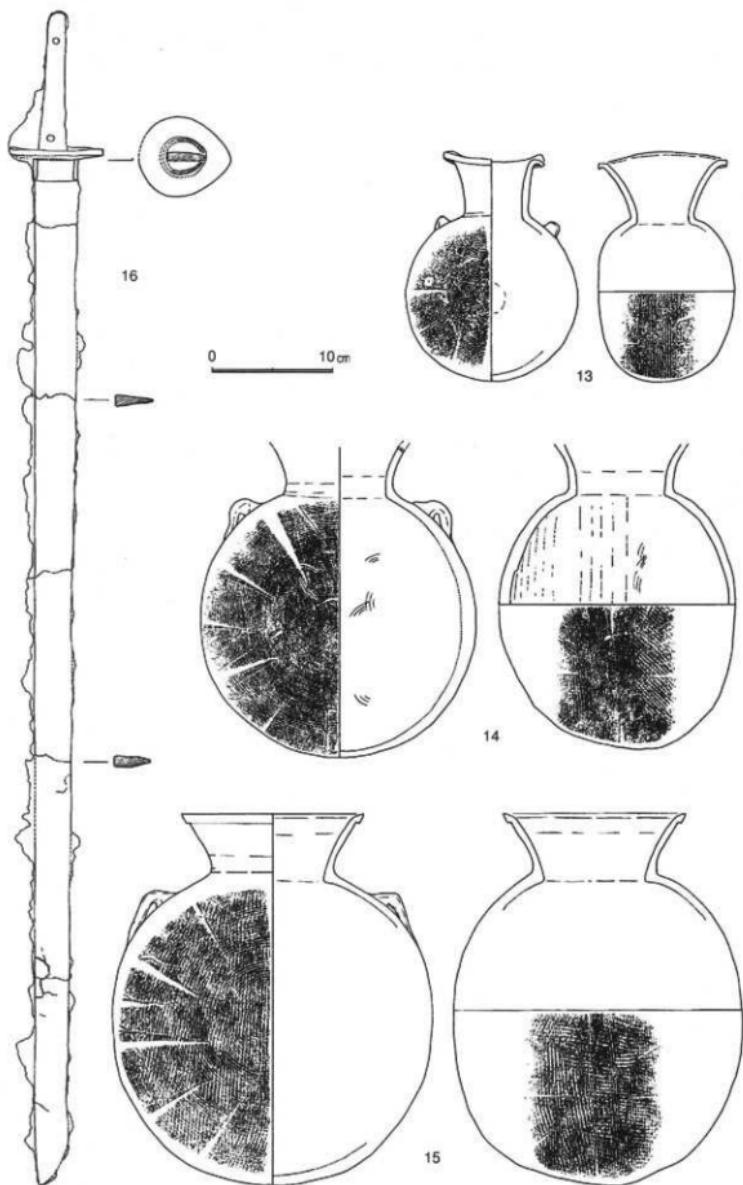
12は瓶であり、口径12.4cm、器高17.6cmを測る。頸部付け根が強く絞られラッパ状に開き、頸部には浅いカキメを施す。外面頸部と体部中程に凹線を施し、体部下半分はヘラケズリを施し底を丸く仕上げている。内面頸部付け根付近には、かすかであるが絞り目が認められる。

13~15は提瓶である。いずれも胸部の背面と背面が対照的に膨らむ形態である。13は器高約18cmを測る小型の提瓶で、口縁部は薄ての二重口縁を呈し焼き歪みが著しい。胸部外面の調整は腹面・背面とも丁寧なカキメを施し、把手は痕跡化し瘤状となっている。内面はナデ調整である。14は残存高25.4cmを測り、口縁端部は欠損している。胸部外面の調整は、腹面がカキメ調整、背面がタタ

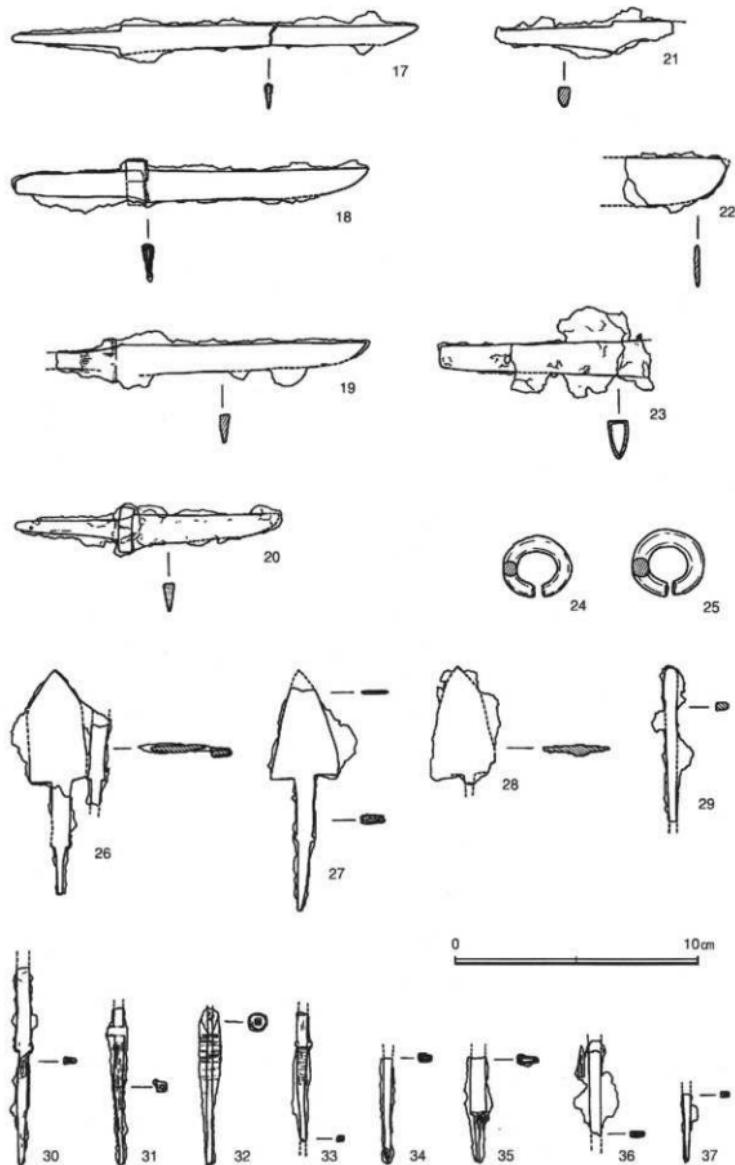




第6图 1号横穴墓出土遗物实测图1 ($S = 1/3$)



第7図 1号横穴墓出土遺物実測図2 (S = 1/4)



第8図 1号横穴墓出土遺物実測図3 (S = 1 / 2)

キの痕跡が残る。胴部内面の調整は腹部はナデ調整、背部はナデ消しているが、かすかに青海波文の当て具痕を認めることがある。把手は環状であるがひしゃげて穴が小さくなっている。15は器高30.2cmを測り、口縁部は薄手の二重口縁を呈し口径15cmを測る。胴部外面の調整は、腹部・背部ともタタキの後や粗いカキメ調整である。胴部内面には青海波文の当て具痕が明瞭に残る。把手の形態は14と同様である。

鉄器はすべて武器類で、種類は大刀（第7図16・第8図22・23）、刀子（第8図17～21）、鉄鎌（第8図26～37）である。

16・22・23は大刀である。16は鐔付の大型の大刀で、全長95.3cm、刃長81.6cm、脣部13.7cm、元幅3.6cm、刃身の背の幅は現状で8mmを測る。形態は白杵彫の分類で刃側二段両闇一文字尻中細茎で、闇の作りは両闇で刃側が2段となっている。茎は茎尻に向かってわずかに幅を狭め、2本の目釘穴が見られる。刃側二段闇の内、刃側の段には4.3×2.9cmの鉄製の柄頭が、茎側の段には長さ7.5cm、幅6.4cmの倒卵形の鉄製鐔が装着されている。22は大刀の峰部分の破片で、幅1.9cmを測る。23は大刀の胴部で、茎尻に向かってわずかに幅を狭めている。胴部中程に1本の目釘穴が認められる。

17から21は刀子である。17は全長16.6cm、刃身長12.3cm、茎長4.3cm、元幅1.2cm、先幅0.8cmを測る。刃の線・棟の線とも緩やかな内反りを呈し、闇は刃・棟両側につく。胴部にわずかであるが木質の付着が認められる。18は全長14.5cm、刃身長9.1cm、茎長5.4cm、元幅1.3cmを測る。棟の線は直線を呈し、刃側に闇が認められる。闇部には長さ約1.7cmの縁金具が装着されており、茎部には木質の付着が認められる。19は茎部の先端が欠損しており、刃身長10.1cmを測る。闇は刃・棟両側につくと推定される。刃部、茎部とも木質の付着が認められる。20は全長約10.8cm、刃身長5.9cm、茎長4.9cmを測る。闇は刃・棟両側につき、そこに縁金具が装着される。茎尻の近くに目釘穴が見られ、茎部には木質の付着が認められた。21は刃身が欠損しており、茎長約4.8cmを測る。闇は刃・棟両側につき、茎部には木質の付着が認められた。

26～37は鉄鎌である。26～28は短頭の直角肩三角形式である。26は全長9.2cm、鎌身部4.5cmを測り、施被は有施被である。欠損した有施被の頭部が融着している。茎部には木質の付着が認められた。27は鎌身部の先端が欠損しているが、全長約9.8cm、頭部5.4cmを測る。施被は棘施被であり、茎部には木質の付着が認められた。28は頭部が欠損しており、鎌身部4.1cmを測る。29は長頭鎌であり、片刃の様に観察される。施被部途中から欠損している。30～37は欠損した施被部、もしくは茎部である。30・35是有施被で、33は棘施被である。いずれも木質の付着が認められた。

第8図24・25は装身具の耳環である。いずれも錫化が著しく金銀等を認めることができない。24は、直径2.8cm、短径2.5cmを測る。25は24と離れた位置から出土しているが、24とセットとなるものであろう。直径2.9cm、短径2.7cmを測る。

第2節 2号横穴墓（第9図～第12図）

2号横穴墓は、1号横穴墓の東側から検出された横穴墓である。開口レベルは墓道床面で1号横穴墓から約2m下がった標高約7.8mではほぼ南向きに開口する。東側に隣接する3号横穴墓と玄室の壁が60～70cmほどしか離れていない。その他の横穴墓と比べ遺存状態が悪く、玄室内の天井部のはほとんどは崩落しており、側壁も奥壁がほぼ残っているのに対し、玄室部から墓道にかけての側壁は、そのほとんど～上半分が崩落している。玄室から玄門にかけての壁は、強く火を受けた形跡が認められることと、地山の岩質が他の横穴墓と比較して軟弱であること等が原因で天井部地山が崩落した可能性が考えられる。

墓道（第10図） 調査区の関係で閉塞部から約1.0mしか調査を実施していない。調査区内では墓道先端に向かってわずかな傾斜を持って下がっている。閉塞部前面には長さ20cm、幅46cm、深さ6cmほどの浅い溝が掘られている。他の横穴墓と比較して地山が軟弱な部分に掘削している関係で、墓道の壁も崩落している状況が見て取れる。

土砂堆積状況（第10図） 玄室・玄門の天井が崩落しており、墓道にかけてその上層は一体的に土砂が堆積していた。まず玄室及び玄門部の土砂堆積状況であるが、玄室から玄門にかけて、床面には強くしまった茶褐色疊混り土（12層）が3cm～20cmの厚さで、上面がほぼ水平になるように堆積していた。この層の上面でも遺物が検出されていること、また閉塞石下部がこの層に被っていることを考えると、追葬時の床面と考えられる。

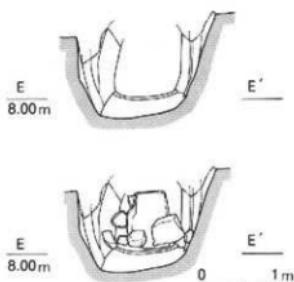
玄室内の玄門付近を除き、この9層上には炭層（11層）が4cm程堆積している。これは玄室および玄門の壁が強く焼かれた形跡があることから考えると、玄室内で火を燃やした際の燃えかすである炭の可能性が非常に高い。この層中からも遺物が検出された。

閉塞石から玄室中程まで11層の上面に一部堆積するように茶褐色粘質土層（10層）が、墓道から土砂が流入してきた状態で堆積している。図示していないが、この層から須恵器壺片が1点出土している。

この上層に地山崩落土（4層）が墓道にかけて、玄室内に落ち込むように玄室奥の方に向かって傾斜をして厚く堆積している。この層の下層の地山ブロックの下部にも火を受けたものも多数認められた。図示していないが、この層から須恵器壺体部片4点、土師器壺体部片6点が出土している。

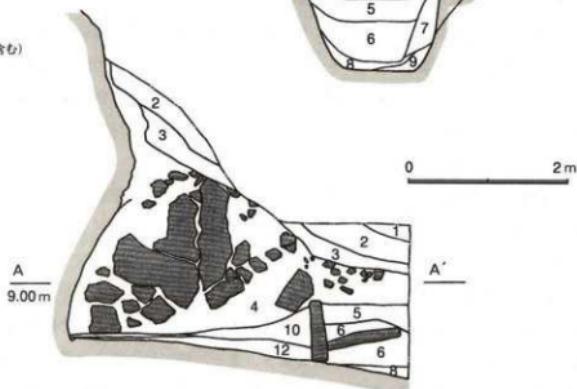
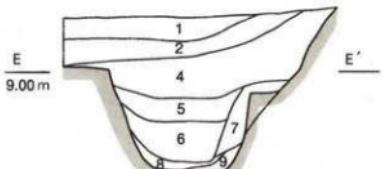
次に墓道内堆積状況であるが、黄褐色粘質土層（8層）の上層に締まっていない茶褐色疊混り層（6層）が堆積している。この層中にやや大きめの閉塞石が倒されている。その上層に茶褐色粘質土層（5層）が堆積し、その上に地山崩落土（4層）が玄室から続いている。よって、玄室および玄門崩落時には、墓道が最低でも閉塞石上面までは埋まっていた状況が読みとれる。

調査区端の横断土層について、赤褐色粘質土層（9層）と



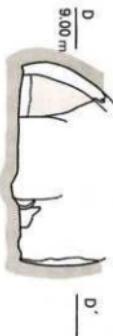
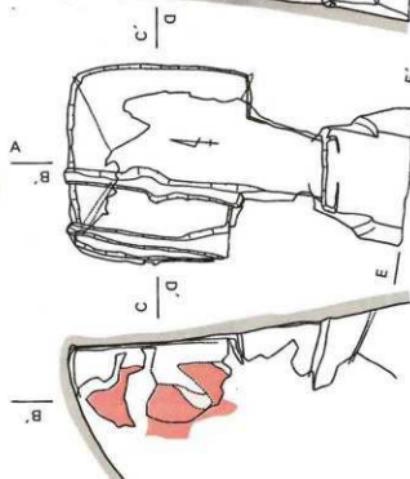
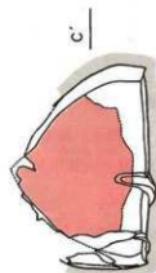
第9図 2号横穴墓実測図1 (S=1/60)

- ①赤褐色粘質土（2~3 cm躍多く含む。
 斧土）
 ②淡黄褐色粘質土（躍少ない）
 ③茶褐色粘質土（1~5 cm躍多く含む）
 ④赤褐色鐵凝り土（崩落土）
 ⑤赤褐色粘質土（1 cm程の躍多く含む、
 粘性強）
 ⑥茶褐色鐵凝り土（もろい）
 ⑦暗黃褐色粘質土（躍少ない）
 ⑧黃褐色粘質土（躍少ない）
 ⑨赤褐色粘質土（5 mm以下の躍含む）
 ⑩茶褐色粘質土（5層と類似）
 ⑪炭・燒土層
 ⑫茶褐色膠泥混り土（強くしまる）



■ 強く火を受け、
黒ずんでいる。

■ 軽く火を受け、
うすい赤を程
している。



第10図 2号横穴墓実測図2 (S = 1/60)

黄褐色粘質土層（8層）の関係については判然としないが、この8層・9層を切って暗黄褐色粘質土層（7層）が堆積しており、またこの7層を茶褐色疊混り土層（6層）・茶褐色粘質土層（5層）が堆積していることから、少なくとも2回の侵入行為を想定することができる。

以上のような状況から、玄室及び玄門の天井部が崩落した時期を考察すると、①墓道堆積状況より、天井崩落時には墓道が土砂により埋められていた②閉塞石付近の土砂堆積状況より、天井崩落時には石材により閉塞が施してあった③玄室内の炭層（11層）の直上に崩落土層（4層）が堆積している、のような状況から最終追葬時が完了して、墓道が埋められてから幾ばくか経ってから天井部地山が崩落したと考えられる。この天井部地山が崩落した際、閉塞石上面の標高約8.7m以上の墓道埋土は、その衝撃で押し流されたものと考えられる。

閉塞石・閉塞部（第9図～11図）　閉塞部はその天井部が崩落しており、現状で高さ76cm、幅80cmを測る。閉塞部の全面に浅い掘り込みが認められる。閉塞石を受ける割り込み等は認められなかった。

閉塞石は閉塞部前面で検出されており、基本的な閉塞状況は次のとおりである。まず、閉塞部の中央に高さ73cm、幅51cm、厚さ18cmの板石を置き、その右側に現状では墓道に向けて倒れているが長さ97cm、幅39cm、厚さ15cmの板石を置き、また左側には人頭大の礫を置き隙間を塞いでいる。石材は地山を構成する岩質と類似するように見受けられ、これら板石には加工痕等は認められなかつた。右側の板石が倒されているが注目されるが、これは初葬後に玄室に侵入する際、中央部の板石は動かさず、この右側の板石だけを引き倒して閉塞部右側から侵入したものと推定される。

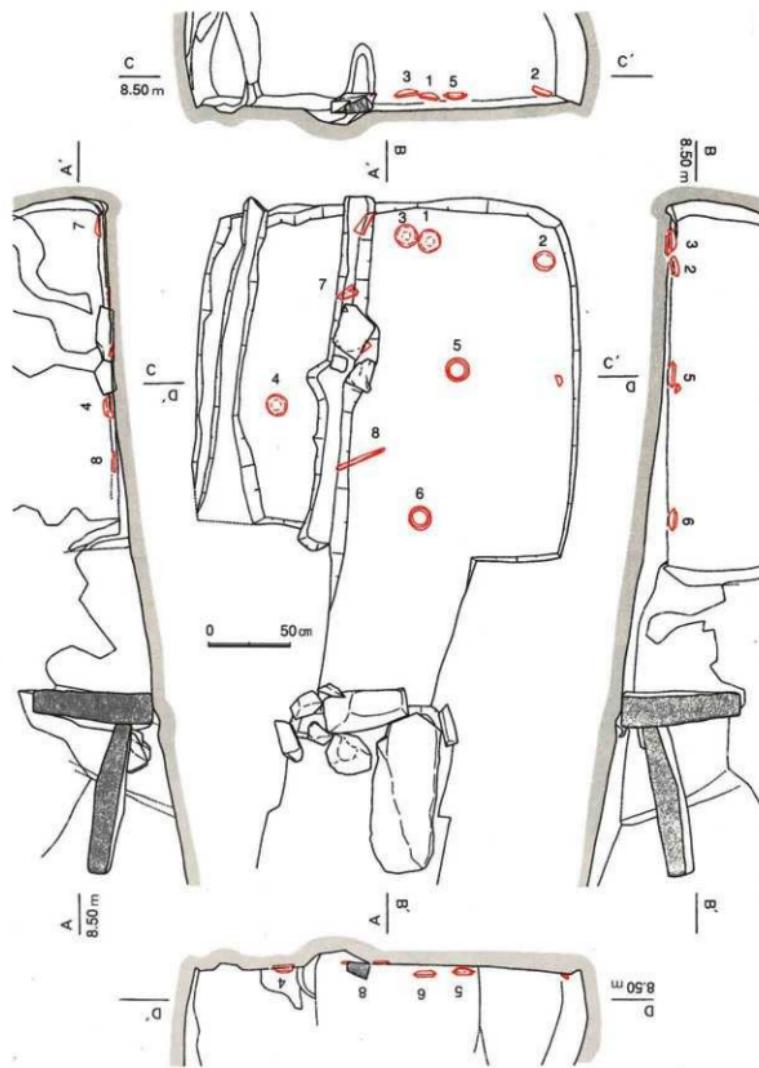
玄門（第10図・11図）　玄門は玄室から閉塞部にかけて狹まる形態で、長さ95cm、幅は玄室側で87cm、閉塞部側で70cmを測る。右壁の床面より10cm程より上部は、うすい赤色に変色しており火をうけたものと考えられる。また変色した部分は、玄門の壁が残存している部分だけでなく、地山面まで続いている。言い換えれば、この薄い赤色に変色している部分から上部の地山が崩落している。このことについては玄室の項で説明する。図示していないが、玄門中程の堆積土（10層）中より須恵器壺片が1点出土している。

玄室（第10図・11図）　玄室の天井部はすべて崩落しており、奥壁がほぼ残存している以外は上部1/3、場所によっては床面まで崩落している。玄室の規模は、長さ220cm、幅234cm、推定の高さ165cmを測り、やや幅広い正方形を呈する。形態は当横穴墓群唯一の妻入りの四柱式天井である。四壁は内傾しながら立ち上がり、天井部の軒を加工しない、いわゆるテント形である。

床面には壁面4周に玄門部まで延びる幅約4～8cm、深さ約2～3cmの浅い排水溝が見られ、それを切るように、玄室左側の南北方向に2本の溝が掘られている。このうち、左壁側の溝は、長さ198cm、幅15～39cm、深さ約3cm、玄室中央部側の溝は、長さ218cm、幅29～38cm、深さ約7cm、それぞれの溝の中心間の距離は約65cmを測る。玄室中央側の溝は奥壁の高さ35cm、前壁の高さ32cm、左壁側の溝も奥壁にも掘削している。このことからこれらの溝の用途は排水溝とは考えにくく、玄室左側に屍床を造り出すためもしくは現状では消失しているが石棺もしくは木棺を固定する溝とも考えられる。

壁面は火を受けており、特に奥壁・右壁奥壁側2/3の上部・左壁上部は黒ずんでいる。また、右壁の天井部に近い崩落した断面は、須恵器壺跡の壁の様に2～3cmの幅で地山が赤く変色している。このことから、この部分は特に強く火を受けたものと推定され、実際に火を焚いた場所は玄室のや

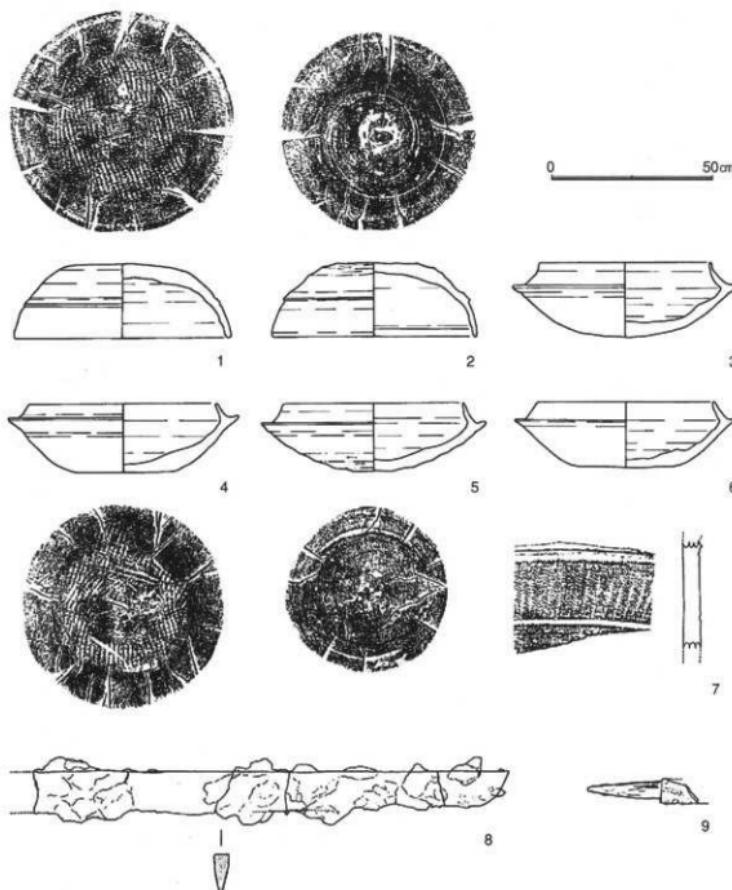
や奥壁側と推定される。その他の部分については、玄室から玄門にかけて薄い赤色に変色しており、奥壁側より弱く火を受けたものと推定される。また、前壁側と左壁部分の上部は、壁面のみならず地山まで火を受けた痕跡が確認された。



第11図 2号横穴墓遺物出土状況図 (S = 1 / 30)

この天井部地山が崩落した時期および原因は、まず時期であるが土砂堆積状況の項の中で記述したとおり、最終閉塞を実施し墓道を埋めた後に幾ばくか経った後に崩落しているものと推定される。問題は原因であるが、一つの可能性として考えられるのは玄室内で火を焚いた時に、その火が玄室および玄門内の壁面の地山の割れ目まで火が通ったこと。そのことにより、地山の割れ目の空気が膨張し、その隙間が開いたことによるものと考えられる。ただでさえ、2号横穴墓は他の横穴墓を掘削した地山より脆弱な場所に掘削しているのに、この行為があったことにより崩落を誘因したのではないだろうか。このことは、残存している壁面以外地山まで火を受けた痕跡があることや地山が火を受けたところから崩落していることなどから傍証される。

玄室内遺物出土状況（第11図） 玄室内からは、須恵器蓋坏6点、壺片3点、大刀1点、刀



第12図 2号横穴墓出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

子1点出土している。遺物は茶褐色疊泥り層（12層）中、もしくは炭層（11層）中より出土した。須恵器のうち、2・3・5・7は11層中出土、その他は12層上面出土であるが、いずれも11層が薄いことや天井部の崩落の衝撃により動いている可能性があることから、玄室で火を焚いた後に置かれたものか否かは判然としない。図示していないが、11層中より土師器壺体部片が3点出土している。

鉄器のうち大刀（8）は玄門付近の12層上面に置かれていた。このことから大刀片は玄室内で火を焚く前に置かれていたものと考えられる。その他に刀子が出土しているが、出土地点は不明である。

玄室中央部に南北に走る溝上で検出された礫は焼けており、その礫のまわりのみ炭層（11層）が床面まで充填しており、礫は炭層中より検出した。このことから、この礫は玄室内で火を焚いた後に移動されたのか、もしくは玄室内で火を焚いた時に何かしらの燃焼する物質の上に置かれ、その物質が焼け落ちたときに、その物質の焼けた後の上に落ちたものと考えられる。

2号横穴墓出土遺物（第12図） 須恵器の器種構成は、蓋坏蓋（1・2）、坏身（3～6）、壺（7）である。

1・2は蓋坏蓋である。1は口径13.6cmを測り、口縁端部は丸くおさめ、肩部に2本の浅い沈線で稜を表現している。この蓋の特徴は、ロクロから切り離し後の天井部の調整を、タタキの工具により行っていることである。ヘラケズリをした痕跡は認められない。内面には当て具痕はないが、その他の蓋坏より内面天井部を強くナデしているように観察された。天井中心部には不定方向ナデが認められた。また天井部の厚みもその他の蓋坏と比較して均等に厚いように見受けられた。2は口径12.5cmを測り、口縁部と天井部の境には2本の凹線とナデにより稜を設けている。天井部前半はヘラケズリを施し、中心部にはヘラ起こし痕が明瞭に残る。口縁端部内面には浅い沈線を馳らす。図示していないが、炭層（11層）中より焼成不良の蓋坏蓋天井部片が1点出土している。これら蓋坏蓋の時期は、いずれも大谷編年出雲4期である。

3～6は蓋坏坏身である。いずれも受部径13.8～14.2cmを測る。4は1と同様にロクロから切り離した後の調整をタタキの工具により実施していることから1とセットと考えられる。また受け身の立ち上がりも他のものと比較して若干低いように見受けられ、器壁も他のもの比べ厚い。3は焼成不良の坏身で、内面底部に不定方向ナデを施す。外面の器壁が荒れており、調整は不明である。5はやや焼成不良の坏身で体部外面下半分を回転ヘラケズリを施しているが、底部はヘラ起こし痕が残る。内面底部には不定方向ナデを施す。6の外面の器壁が粗く、調整不明である。

7は壺口縁部である。口縁部中程の破片と考えられ、外面には凹線を2本施し、その中に波状文を施す。内面はナデ調整である。図示していないが、その他に玄室内から壺体部片2点が出土している。

その他土器類として、図示していないが玄室内炭層（11層）中より土師器壺体部片が3点（その内2点が接合）出土している。

鉄器は、大刀（8）と刀子（9）が出土している。8は大刀で刃部の途中から脇部にかけて欠損しており、残存長29.1cm、背幅は現状で9mmを測る。9は刀子で、刃部が欠損している。関部は両側につくものと推定され、関部には縁金具が装着されている。

第3節 3号横穴墓（第13図～15図）

3号横穴墓は、2号横穴墓の東側から検出された横穴墓である。開口レベルは墓道床面で標高約7.6mで、ほぼ南向きに開口する。玄室壁同士の距離が東側に隣接する2号横穴墓と60～70cm、西側に隣接する4号横穴墓と約1.0mほどしか離れていない。

墓道（第13図） 調査区の関係で閉塞部から約0.9mしか調査を実施していない。地山から深いところで約1.5m掘削している。幅約1mと狭く、玄門幅よりわずかに広い程度である。調査区内では墓道先端に向かってわずかな傾斜を持って下がっている。閉塞部前面にはT字形の深さ3cm程の浅い溝が掘られ、墓道先端に向けて調査区外に続いている。

土砂堆積状況（第13図） 閉塞石がないため、玄室中程まで土砂が一體的に堆積している。土層は大きく分けて4層群に分けることができた。上から1層は横穴墓検出時の客土で、2層は礫があまり含まないことから流土と考えられる。5層上面に閉塞用とも考えられる石材が載っているので、その面が最終侵入面かも知れない。いずれにしても3層は最終侵入段階の埋土と考えられ、その間に炭層（3～2層）があることから、その埋める段階の途中何らかの行為を行ったものと考えられる。5層と7層の間に炭層（6層）を挟んでいることや横断土層から5層は8層を切っているとも見られることから、7層上面も侵入面かもしれない。7層は8・9層を切っていることから確実に玄室内に侵入した面と考えられる。7～3層は須恵器蓋坏・壺・鉄器が出上していることから、最終侵入時に玄室内に流入した土砂の搔き出した層と考えられる。10層上面にも閉塞用とも考えられる石材が載っていることから10層上面も追葬面かもしれない。10層は地山掘削土である明茶褐色粘質土で初葬の埋土と考えられ、閉塞部の手前で途切れる。

閉塞部（第13図） 閉塞部には、幅10cm、深さ8cm程の削り込みが認められた。その削り込みの前面には長さ96cm、幅約24cm、深さ約3cm程の浅い溝が掘られている。閉塞部に石材等は認められなかったが、調査区端で人頭大から拳大の礫が見つかっている。このことから、当初閉塞石が存在していたが、初葬後除去されたものと考えられる。

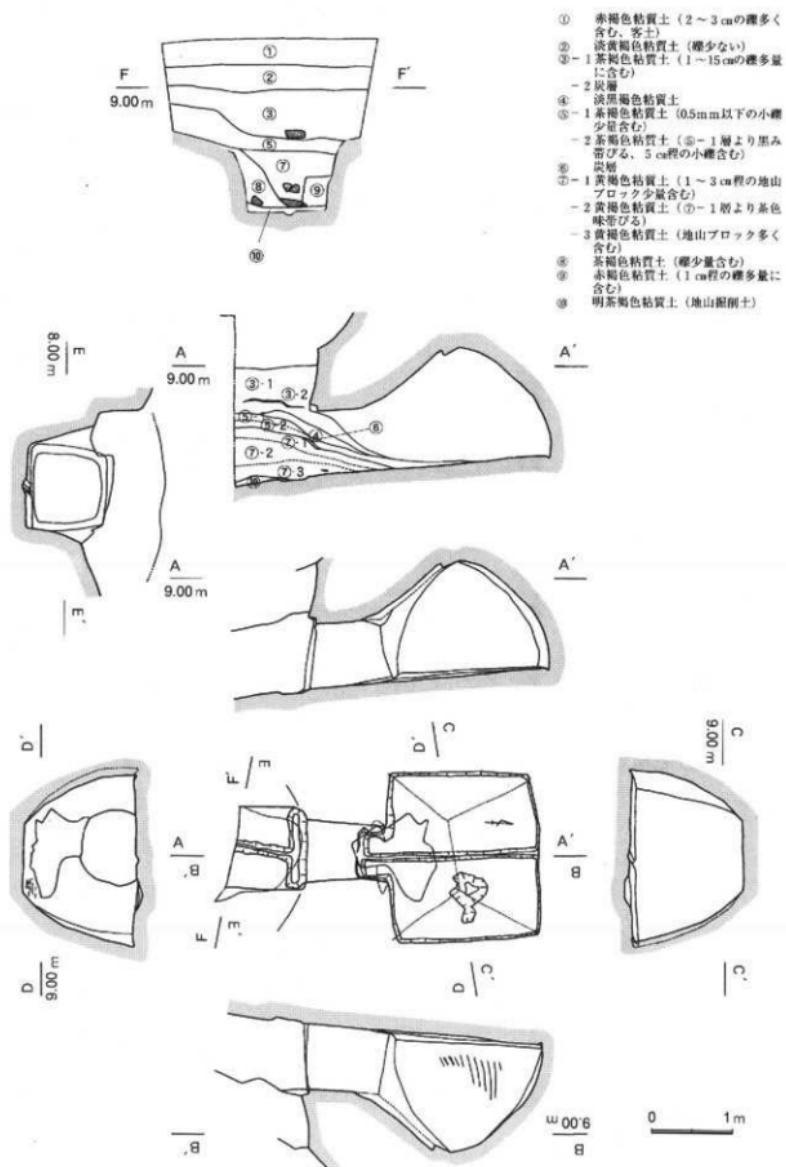
玄門（第13図） 玄門は玄室から閉塞部にかけてやや開く形態で、長さ約1.0m、幅は玄室側で約0.5m、閉塞部側で約0.7mを測る。横断面は閉塞部側は長方形に近いが、玄室側の側壁および天井部はやや丸み、側壁との界線は明瞭ではない。

玄室（第13図・15図） 玄室の規模は、長さ186cm、幅206cm、高さ141cmを測り、やや横長の長方形を呈する。形態は平入りの四柱式天井である。四壁は内傾しながら立ち上がり、天井部の軒を加工しないわゆるテント形である。各壁の界線も明瞭で、前壁から玄門にかけて天井部が崩落している以外は、残存状況は良好である。

玄室内には全体的に拳大から人頭大の礫が散乱しているのみで、遺物は出土しなかった。

床面には4壁沿いおよびほぼ中軸に沿って縱方向に玄門部まで延びる幅約8cm、深さ約3cmの浅い排水溝が見られる。以上の溝により左右に屍床を造り出すかたちになっている。その右側には長さ約60cm、幅46cm、深さ約10cmの不定形な掘り込みが認められる。

壁面は全体的に平滑に仕上げられ、わずかに右壁下部に幅約6cmの縱方向の工具痕、前壁天井部に幅約5cmの横方向の工具痕が認められるのみである。いずれも、最終的な調整痕と考えられ、ど



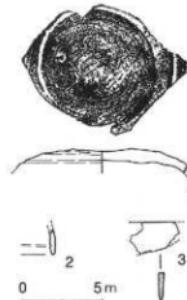
第13図 3号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

ちらが起点になるか確認することはできなかった。

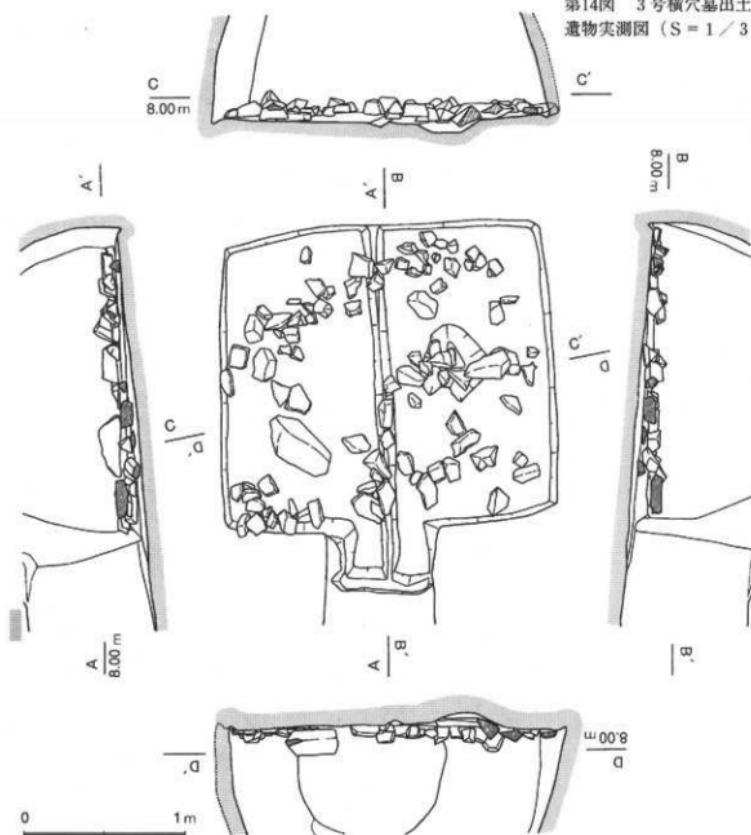
3号横穴墓出土遺物（第14図） 玄室内から遺物の出土はなく、すべて墓道の搔き出し土層（7-3層）よりの出土である。図示したのは須恵器蓋坏蓋（1・2）、刀子片（3）で、その他に須恵器甕片6点出土している。

1・2は須恵器蓋坏蓋である。1は天井部の破片で、外面には回転ヘラケズリを施し、中心部にはヘラ起こし後ナデついている。内面には不定方向ナデが認められる。2は口縁部の破片で、内面には端部に近い位置で浅い沈線を廻らす。時期は大谷編年出雲4期である。

3は刀子鋒部の破片である。残存部の背幅は4mmを測る。



第14図 3号横穴墓出土
遺物実測図 ($S = 1 / 3$)



第15図 3号横穴墓玄室実測図 ($S = 1 / 30$)

第4節 4号横穴墓（第16図～18図）

4号横穴墓は、3号横穴墓の東側から検出された横穴墓である。開口レベルは墓道床面で標高約7.8mではば南向きに開口する。3号横穴墓と玄室の隙が1.0mほどしか離れていない。

墓道（第16図） 調査区の関係で閉塞部から約2.0mしか調査を実施していない。地山から深いところで約2.5m本横穴墓群中では最も深く掘削している。幅約1.1mと狭く、玄門幅よりわずかに広い程度である。調査区内では墓道先端に向かってわずかな傾斜を持って下がっている。

土砂堆積状況（第16図） 上から1層は表土である。2層～6層は流上なのか最終埋葬時の埋土なのかは不明である。9層上面は玄室への最終侵入時の閉塞石が載っていること等から最終侵入時の床面と考えられ、7層・8層は最終埋葬時の埋土と考えられる。10層は良く締まっており、初葬後の侵入面とも考えられる。閉塞石より玄門側は、11層は締まっておらず最終侵入時以降の墓道からの流入土と考えられ、12層は比較的締まっており、最終侵入時の床面と推定される。

閉塞部・閉塞石（第16図・17図） 閉塞には人頭大以上の割石を使用しており、閉塞部のほとんどを覆った状態で検出された。この閉塞石は、玄室への最終侵入時とそれ以前の少なくとも2つに分けられる。まず、最終侵入時のものは、9層上面に構築されたもので、割石を4～5段積み上げたもので、それ以前のものと比較して大きめの石材を使用している。それ以前のものは、床面直上から1段分残存している。

閉塞部には、幅6～14cm、深さ8cm程の削り込みが認められた。その上部の削り込み面には、右から左方向に幅6cm程の工具痕が観察された。その削り込みの前面には長さ110cm、幅約13cm、深さ約3cm程の浅い溝が掘られている。

玄門（第18図・17図） 玄門は閉塞部から玄室にかけてやや開く形態で、長さ約128cm、幅は玄室側で約80cm、閉塞部側で約72cmを測る。床面中央部には主軸に沿って幅14cm、深さ3cmの溝が掘られている。この溝は玄室4壁沿いにある溝と接続しており、墓道に続いている。横断面は閉塞部側は長方形に近いが、玄室側の側壁および天井部はやや丸み、側壁との界線は明瞭ではない。

玄室（第18図・17図） 玄室の規模は、長さ185cm、幅が玄門側で223cm、奥壁側で188cm、高さ142cmを測る。奥壁側に向かって幅が狭くなる横長の長方形を呈する。形態は平入りの四柱式天井である。四壁は内傾しながら立ち上がる。前壁のみ右壁から左壁に向かって途中で途切れる天井部の軸線が表現され、テント形家形を指向しているものと考えられる。

床面の四壁に沿って幅約5～10cm、深さ約3cmの溝が掘られ、玄門付近で合流し墓道に向けて続いている。床面右側には拳大から人頭大の礫が散かれており、礫床と考えられる。

壁面は滑滑に仕上げているが、3号横穴墓と比較すると雑な印象を受ける。4壁とも工具痕が認められ、壁面上部は上から下方向もしくは右から左下方方向に、壁面下部は壁面が接する界線から壁面中央に向かって、幅10cm程の丸刃状の工具痕が認められる。このうち界線付近の工具痕の方向が、1号横穴墓と4号横穴墓のそれが反対方向であるのが注意された。

壁面には玄門天井部のレベルより少し下がった位置に喫水線が認められ、往く何時かに玄室が水

没していた様である。

玄室内人骨・遺物出土状況（第17図） 玄室内から人骨のほか、須恵器蓋坏2点、提瓶1点、甕2点、土師器甕1点、刀子3点、耳環1対出土している。

人骨は右壁玄門側に頭蓋骨片、前壁玄門付近に大腿骨？片が検出され、このうち頭蓋骨片は残存状態は非常に悪い。

土器類は、須恵器蓋坏が奥壁沿い（2）と右壁沿い（1）にあるのを除き、玄門右側付近に集中している。いずれも横転した状態で泥が表面に付着している。玄室側壁に喫水線が認められ、玄室半分程の高さまで水が充填された時期があると考えられることから、遺物は原位置から移動している可能性が高い。

鉄器は、刀子（7）が右壁の前壁寄りから出土している。その他（8）と（9）の刀子片は礫の下から出土した。このことから、初葬時から玄室内に礫が敷かれていないと考えられる。

4号横穴墓出土遺物（第18図） 須恵器の器種構成は、蓋坏环身（1・2）、提瓶（3）、甕（4・5）である。

1・2は須恵器蓋坏环身で、1は口径11.5cm、受部径14.3cmを測る。外面天井部にはヘラケズリを施している。2は口径10.6cm、受部径13.4cmを測る。天井部にはヘラケズリを施し、中心部にヘラ起こし痕が残る。内面底部には不定方向ナデが認められる。

3は提瓶で、口縁端部を欠損しており、残存部高18.1cmを測る。胴部外面の調整は腹面・背面ともカキメは施さず、同心円状にナデを施す。把手は痕跡化し瘤状となっている。

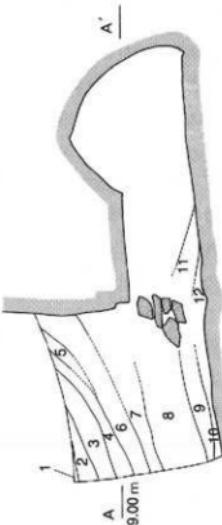
4・5はいずれも小型の甕であるが、体部の調整方法は異なる。4は口径11.6cm、器高18.0cmを測る。口縁部は短く、端部は丸く收める。体部外面はタタキ後上部のみナデ、内面には当て具痕が残る。5は口径11.8cm、器高18.2cmを測る。口縁部は端部を横へ屈曲し面を作っている。体部外面の調整は、底部付近に回転ヘラケズリを施し、上部にはカキメを施す。

内面はすべてナデており、当て具痕は認められない。

6は土師器甕である。口径20cm、器高24.2cmを測る。口縁部は薄く外反し、端部近くに屈曲点が認められる。

風化が著しいことから調整は認めづらいが、外面に刷毛目、内面に横方向のケズリがわずかに認められる。

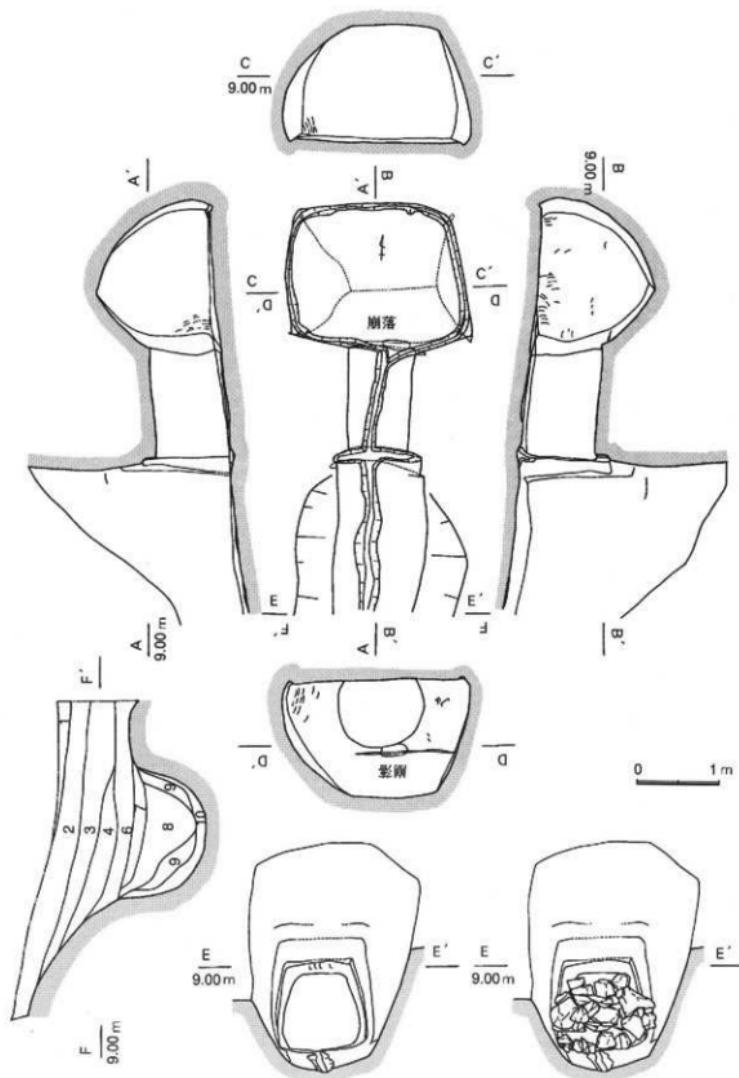
7～9は刀子である。7は全長30.6cm、刃身長21.6cm、元幅2.7cm、背幅は現状で1.0cmを測る大型の刀子である。関は刃・棟両側につき、刃側は2段となっている。茎部に木質の付着が見られ、先端付近には目釘穴が認められた。8は切先部の破片である。9は刃部の途中から欠損している。関部には縁金具が



- ① 黒褐色土（1cm以下の礫多く含む、表土）
- ② 暗茶褐色粘質土（1～2cm程の礫多く含む）
- ③ 茶褐色粘質土（3～5cm程の礫多く含む）
- ④ 暗茶褐色粘質土（灰色混じる、礫少ない）
- ⑤ 鮮褐色粘質土（礫少ない）
- ⑥ 茶褐色粘質土（1～3cm程の礫少含む）
- ⑦ 暗灰褐色粘質土
- ⑧ 暗茶褐色礫凝り土
- ⑨ 暗茶褐色礫凝り土
- ⑩ 暗茶褐色礫質土
- ⑪ 暗茶褐色粘質土（砂層と比べまる）

装着されている。10は緑金具で、内面には木質が認められる。

11・12は耳環で、いずれも鋳化が著しく金銀等を認めることができない。

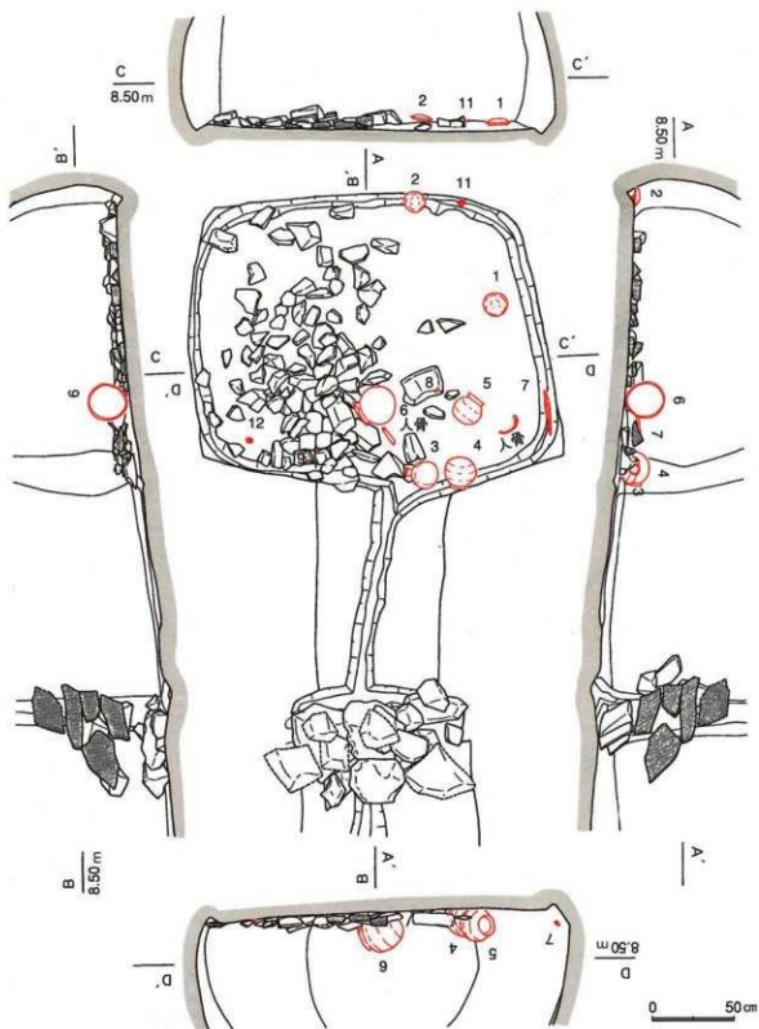


第16図 4号横穴墓実測図 ($S = 1/60$)

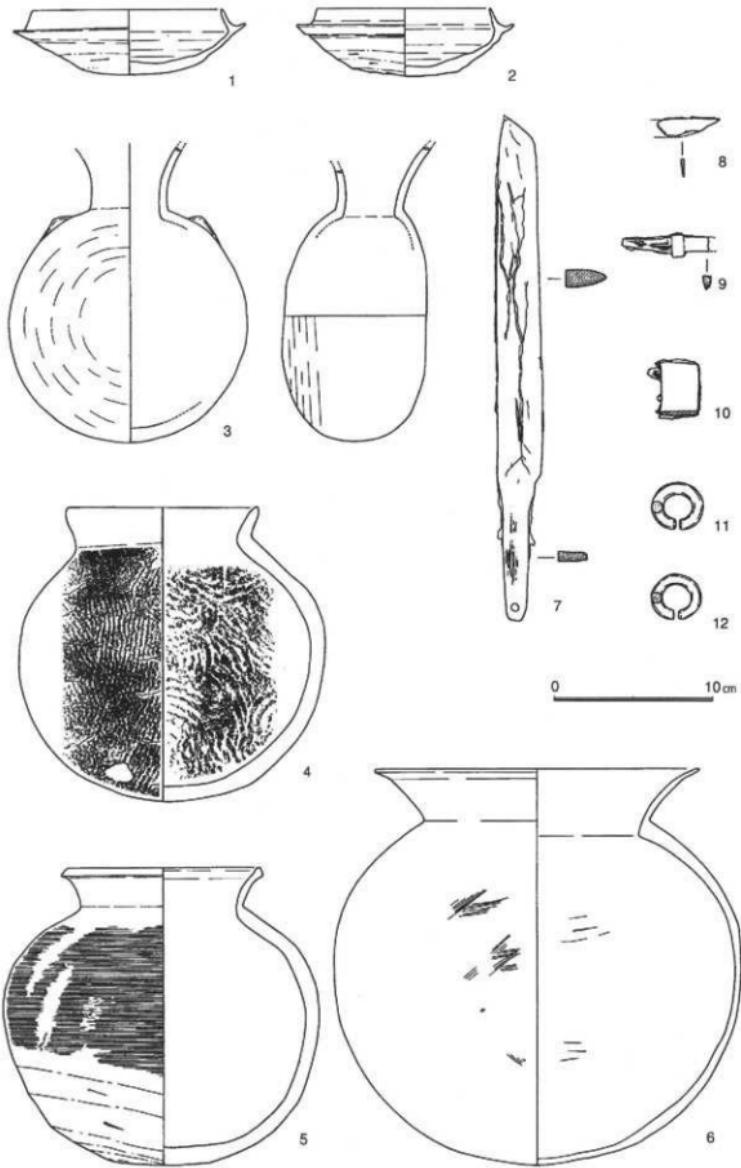
註

1. 大谷見二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994

2. 白杵 熊「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 1984



第17図 4号横穴墓出土状況図 (S = 1/30)



第18図 4号横穴墓出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

第4章 ま と め

今回の調査で検出した横穴墓は4基で、玄室間の距離が60cm～100cm程しか離れておらず、密集して築造されていた。このうち、2号横穴墓は、玄室内で強く火を焚いている痕跡が認められ、全国的に非常に希な検出例であった。

この天井部が崩落している2号横穴墓を除き保存状態も比較的良好で、土層観察や閉塞石の状態から盗掘された形跡は認められなかった。

ここでは今回の調査で検出した4基の横穴墓の調査結果を中心に整理し、最後に近年に中海東岸部で調査された横穴墓を概観してまとめとしたい。

第1節 横穴墓群の時期・形態について

今回の調査で検出した横穴墓の築造時期は、いずれも出土した須恵器から大谷編年出雲4期で、この時期から出雲5期にかけては安来地域では最も盛んに横穴墓が築造された時期である。いずれの横穴墓の追葬も大谷編年出雲4期のなかで終わっているらしく、横穴墓の機能も比較的短期間で終了している。ただ蓋坏等を観察すると出雲4期の中でも若干の時期差が認められる。

横穴墓の玄室の形態は、2号横穴墓を除き半入りテント形である。その中で、4号横穴墓は前壁のみに天井との軒線を表現しており、テント系家形を指向しているものと考えられる。2号横穴墓のみが妻入テント形であり、当横穴墓群中で異彩を放っている。

玄室の規模は大きく2グループに分かれ、1・2号横穴墓が玄室長が2.20m前後とやや大きく、3・4号横穴墓が玄室長1.85m前後とやや小型である。

玄門・墓道部の形態であるがいずれも羨道がなく、二重羨道化した意字型となっていない。

造墓技術として、玄室内で明確に捉えることができるのは、幅10～13cmの丸刃状の工具痕と縱方向に走る丸刃状の削痕である。いずれも壁面を滑らかにする調整段階の痕跡と考えられる。両者の切り合い等は確認できなかったが、丸刃状の工具痕は界線付近の隅より確認できことが多いことから、丸刃状工具痕→丸刃状の削痕の順で壁面の調整が行われたものと推定される。

第2節 2号横穴墓について

2号横穴墓の玄室から玄門部にかけて、側壁が焼けた状態で検出した。このうち玄室奥壁側上部は強く火を受けており、須恵器焼跡のように地山が2～3cmの厚さで赤く変色していた。玄門付近を除き玄室床面前面には、4cm程の厚さで炭が堆積している。この炭は細片化しており、燃焼材等は明らかにすることは出来なかった。このように玄室内で火を焚いたのは確実と考えられる。ただ、須恵器焼跡のように煙道がない形態で、玄室内で強く火を炊けるかどうかについては若干の疑問が残るものも事実である。

この火を焚いた時期であるが、本文中に記述したとおり最終追葬時に行われたものと考えられる。天井部が落盤したのは、この最終追葬が行われ墓道を埋土で埋められた後に起こっている。

横穴墓で火を焚いた形跡があるのは、埋土中に炭層が残んでいる例や前庭部で焼土を検出した例

を除き、安来市高広遺跡IV区1号横穴墓⁵の玄門部から羨道部にかけて側壁が火を受けた痕跡がある例や、安来市岩屋口北遺跡12号横穴墓⁶の閉塞石が焼けて赤変している例等が挙げられるが、玄室内で火を焚いた例は管見では知られていない。

横穴式石室では、兵庫県神戸市高塚山古墳群8号墳⁷で、玄室・前室・羨道部の4箇所・5人以上が火葬されている例のほか、奈良県下でも石室が焼けていた例が知られている。

このように全国的に見て極めて希な例であることや、今回の調査結果からも埋葬儀礼等の復元は困難である。松江市屋形1号墳⁸等の横穴式木室等含め、火葬が全国的に普及する前に火を使ってどのような埋葬儀礼を執り行ったのか、現時点では不明であり将来の資料の増加を待ちたい。

第3節 安来市中海東岸部の横穴墓について

安来市黒井田町・島田町の中海海岸部横穴墓の様相は、これまでに当横穴墓群のほか浜小崎古墳群や小汐手横穴墓群⁹等合計30基が発掘調査されており、次第に明らかになりつつある。

その多くは中海に突きだした丘陵斜面に築かれており、横穴墓へのアクセスは尾根伝いよりも海上より舟で行き來したと考えられるような立地のものが多い。

築造時期は、大谷編年出雲3期が14基、出雲4期が6基である。この内、出雲3期の横穴墓は小汐手横穴墓群からのみ検出されている。

この海岸部の横穴墓と平野内陸部の横穴墓の様相を比較すると、以下の点で様相が異なる。

①出雲3期の玄室形態は、内陸部はドーム形が多いのに対し、海岸部はドーム形とともに妻入テント系が多い。

②出雲4期の内陸部の横穴墓は羨道のある意字型となっているものが多いのに対し、現状では海岸部は意字型になっている横穴墓は1つもない。

その他にも当地域の横穴墓から出土する須恵器のうち、出雲地域から普遍的に出土するものと異なる形態・技法のものが多く出土するなどの点が挙げられる。

こうした違いが、どのような意味を持つのか現時点では明らかにすることが出来ず、ここでは問題の所在を指摘するのに止めた。

註

1. 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥根考古学会誌』第11集 1994
2. 鳥根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」相田田地造成工事に伴う発掘調査 1981
3. 鳥根県教育委員会「岩屋口北遺跡・白コクリ遺跡（F区）」一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書13 1997
4. 神戸市教育委員会「高塚山古墳群発掘調査概要」1994
5. 「口絵・特異な石室」『季刊考古学』第45分特集横穴式石室の世界 雄山閣出版社 1993
6. 鳥根県教育委員会「袖富1遺跡・屏形1号墳」一般国道9号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2 1997
7. 安来市教育委員会「瀬ヶ部遺跡群発掘調査報告書」1994
8. 安来市教育委員会、1998年調査。

写 真 図 版

※数字は挿図番号と対応

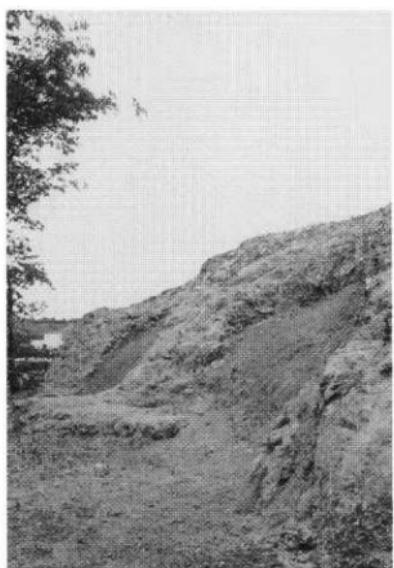
図版 1



調査前近景（西から）



確認調査（西から）



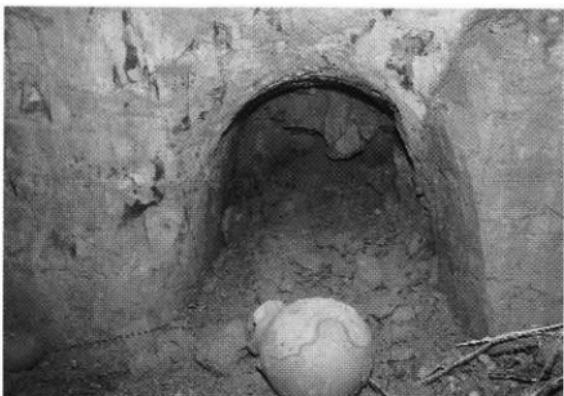
1号・2号横穴墓検出状況（東から）



4号横穴墓検出状況（南から）



1号横穴墓発見時状況
(崩落した玄室天井より)



1号横穴墓発見時状況
(玄室から玄門方向)



1号横穴墓発見時状況
(玄室南東コーナー付近)

図版 3



1号横穴墓閉塞状況



1号横穴墓墓道横断土層
(北から)



1号横穴墓玄室奥壁工具痕



1号横穴墓遺物出土状況
(玄室南東コーナー付近)



1号横穴墓遺物出土状況
(玄室北東コーナー付近)



1号横穴墓大刀出土状況

図版 5



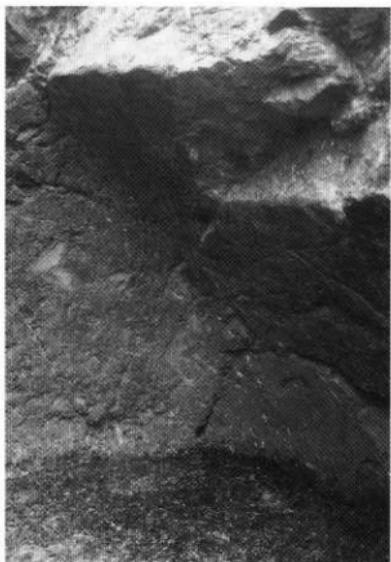
2号横穴墓閉塞状況



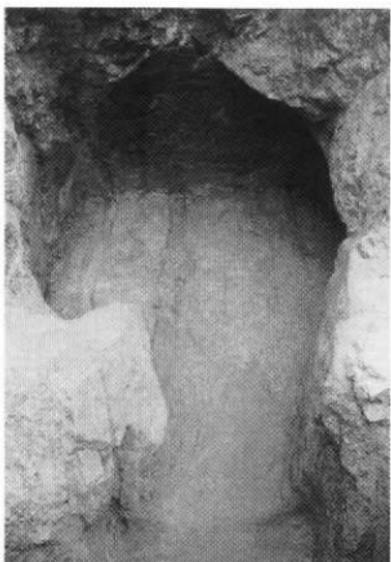
2号横穴墓墓道横断土層
(北から)



2号横穴墓玄室遺物出土状況
(南から)



2号横穴墓玄室炭層検出状況



2号横穴墓完掘状況（南から）

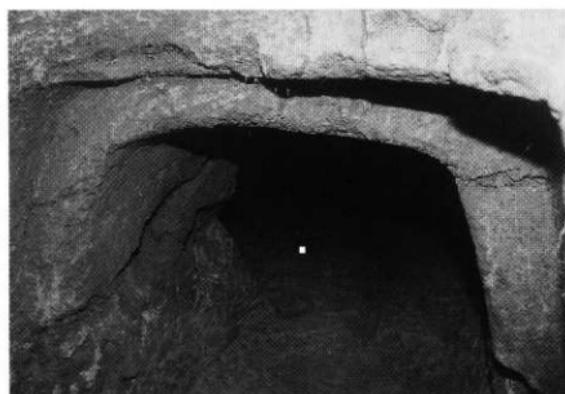


2号横穴墓完掘状況（南から）

図版 7



3号横穴墓墓道（上から）



3号横穴墓閉塞部



3号横穴墓墓道横断土層
(北から)



3号横穴墓玄室砾出土状況



3号横穴墓玄室砾出土状況



3号横穴墓玄室完掘状況



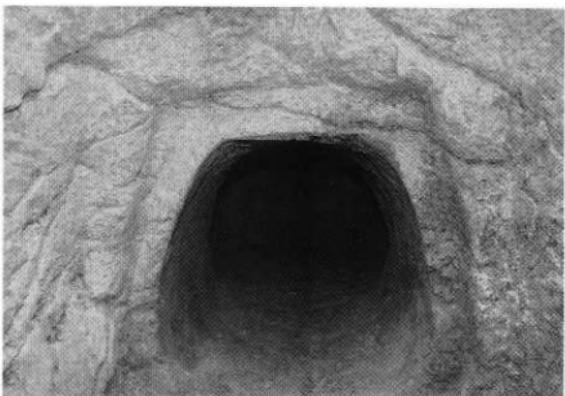
4号横穴墓閉塞状況
(上から)



4号横穴墓閉塞状況



4号横穴墓墓道横断土層
(北から)



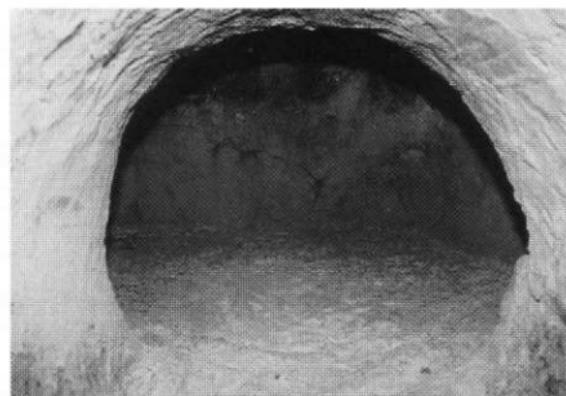
図版 11



4号横穴墓遺物・人骨
出土状況



4号横穴墓遺物・人骨
出土状況



4号横穴墓玄室完掘状況



調査後近景（東から）

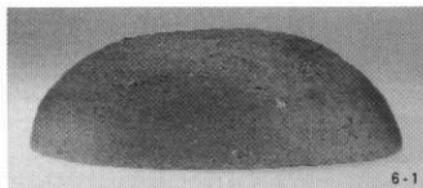


調査後近景（西から）

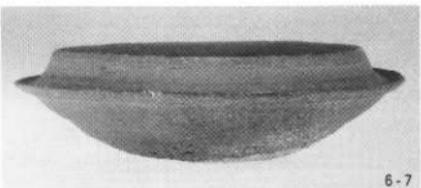


調査後近景（上空から）

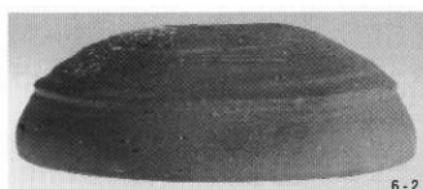
図版1 3



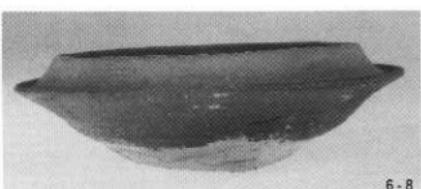
6-1



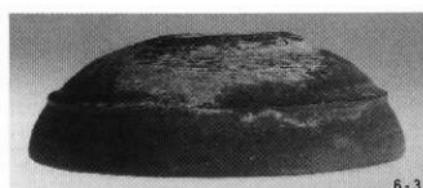
6-7



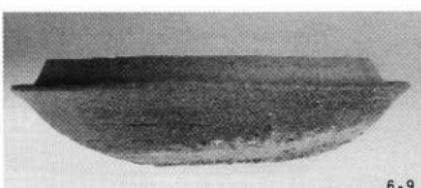
6-2



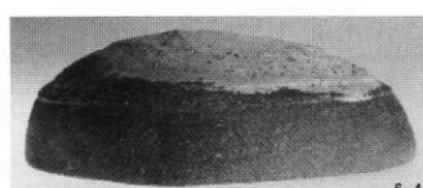
6-8



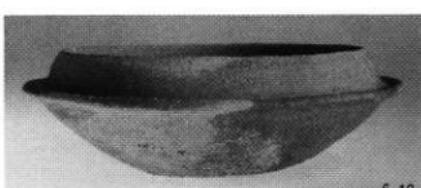
6-3



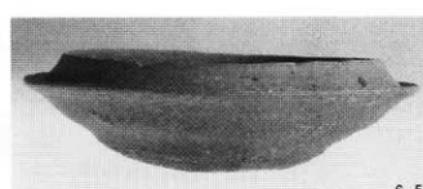
6-9



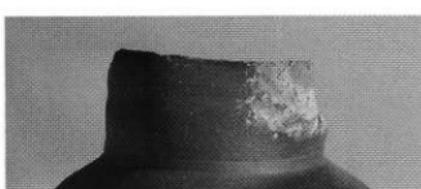
6-4



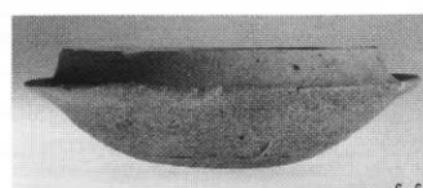
6-10



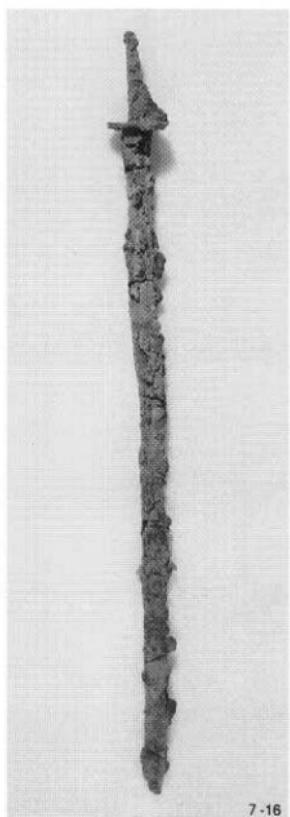
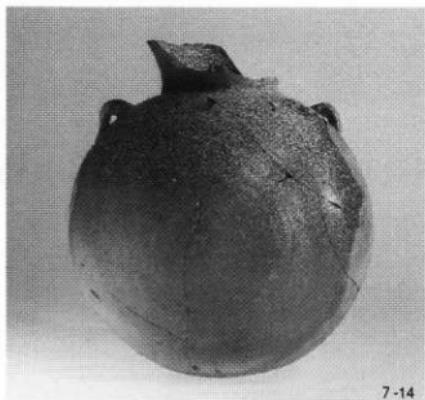
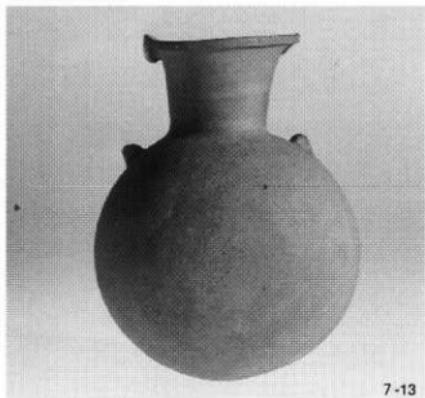
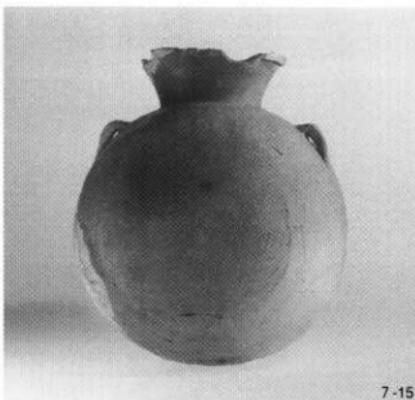
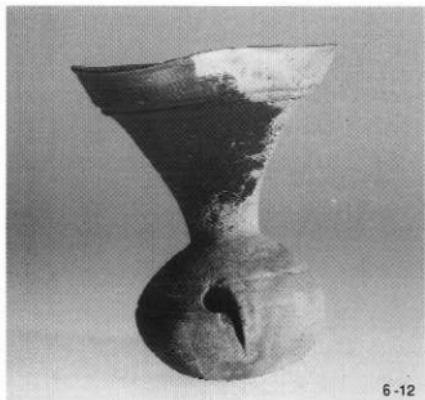
6-5



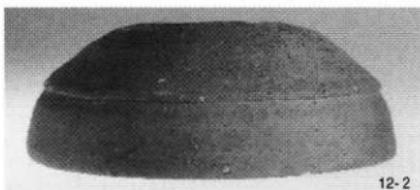
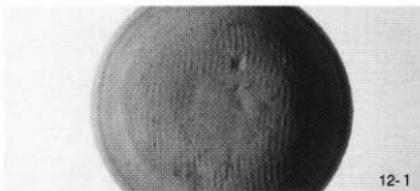
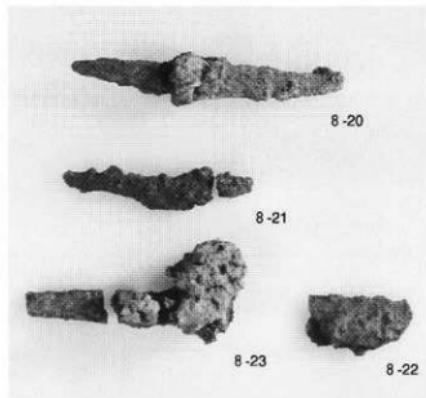
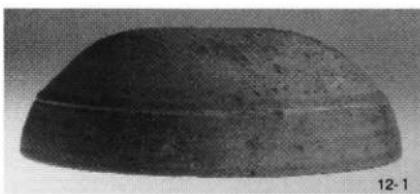
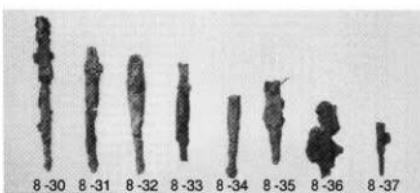
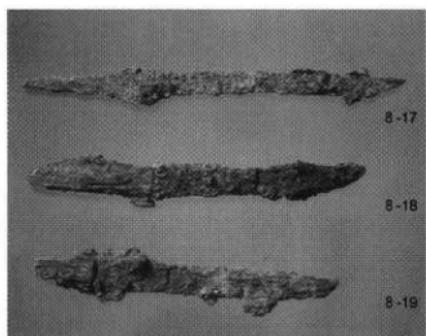
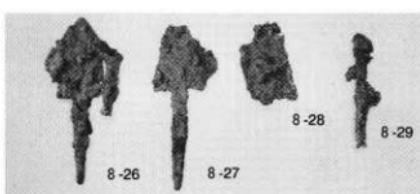
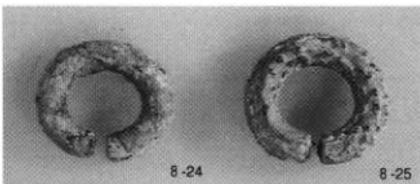
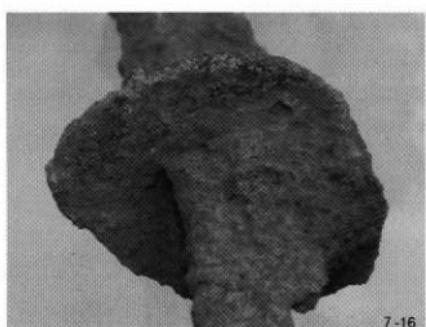
6-6

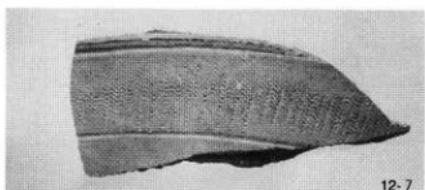
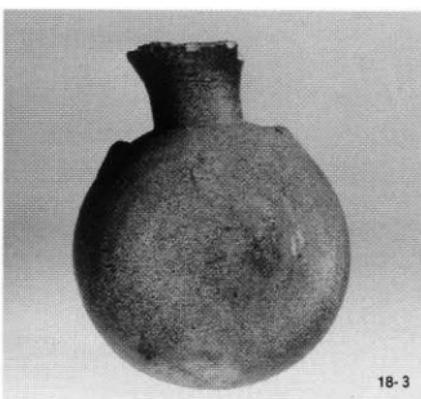
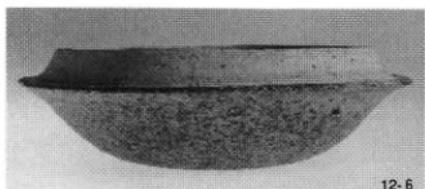
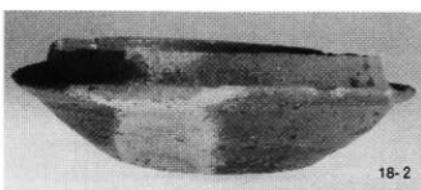
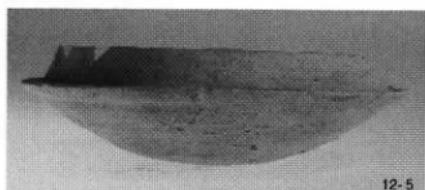
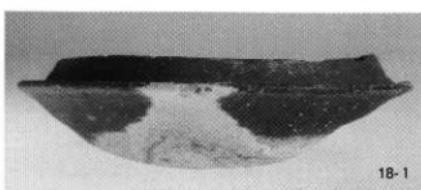
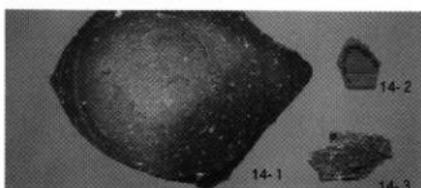
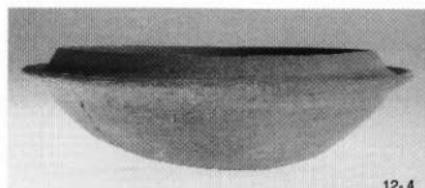
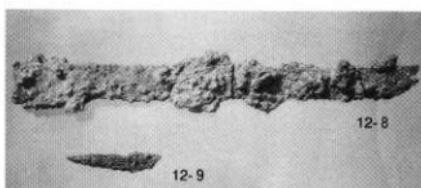
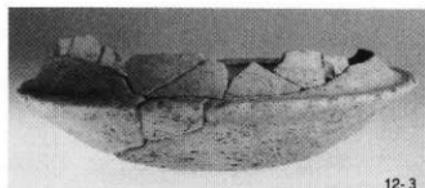


6-11

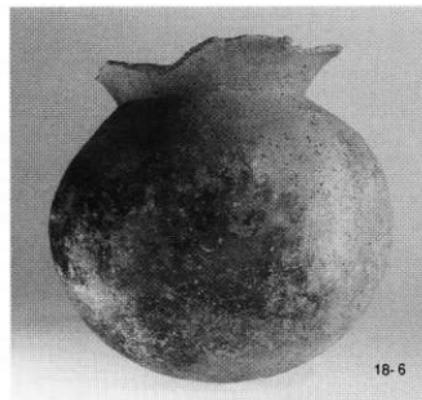
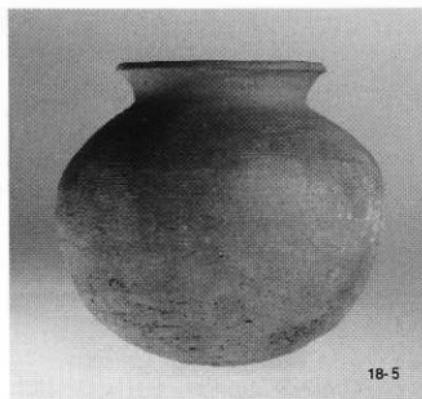
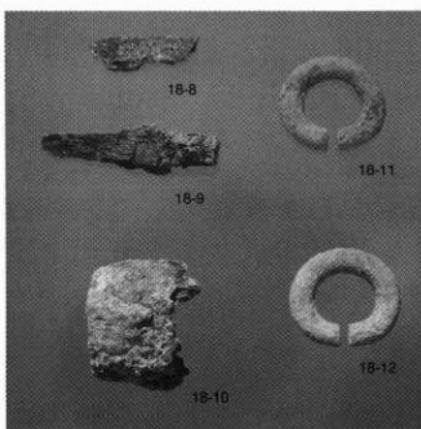
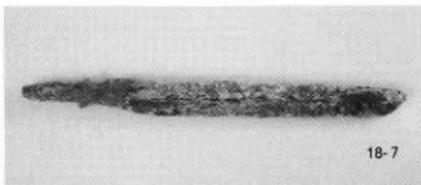


図版15





図版 17



報告書抄録

ふりがな	はつかみよこあなぼぐん			
書名	八神横穴墓群			
副書名	島田地区ふるさと農道整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査			
卷次				
シリーズ名	安来市埋蔵文化財調査報告			
シリーズ番号	第36集			
編集者名	水口晶郎			
編集機関	安来市教育委員会			
所在地	〒692-0011 島根県安来市安来町874-20 TEL 0854-22-2149			
発行年月日	2001年3月			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間
はつかみよこあなぼぐん 八神横穴墓群	しまねけんあんらいし 島根県安来市 しまとうじょうかまづかふ 島田町字八神	32206	35°25'64" 133°17'20"	20000601 ~20000730
調査面積	80m ²	調査原因	農道整備事業に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
八神横穴墓群	横穴墓	古墳時代	横穴墓4基	須恵器、土師器、 大刀、刀子、鉄鏃、 耳環
				2号横穴墓の玄室内で 火を焚いた痕跡が確認 された。

安来市埋蔵文化財調査報告第36集

八神横穴墓群

島田地区ふるさと農道整備事業道路工事にかかる埋蔵文化財発掘調査

2001年3月

発行 安来市教育委員会
印刷 有限会社 松浦印刷